

比 恵 35

—比恵遺跡群第79次調査報告—

2004

福岡市教育委員会

HI E
比 惠 35

－比恵遺跡群第79次調査報告－



遺跡略号 HIE-79
遺跡調査番号 0233

2004

福岡市教育委員会



卷頭写真1 SF 027(転圧痕)



卷頭写真2 SF 027内SD020土層



卷頭写真3 SD020出土遺物(146)



卷頭写真4 SE009出土瓦質土器(30)

序

玄界灘に面して広がる福岡市には豊かな歴史と自然が残されており、これを後世に伝えていくことは現代に生きる我々の重要な努めであります。

福岡市教育委員会では開発事業に伴い、やむをえず失われていく埋蔵文化財については事前に発掘調査を実施し、記録保存に努めています。

今回報告する比恵遺跡群第79次調査においても発掘調査により多くの貴重な成果をあげることができました。

本書が文化財保護へのご理解と認識を深める一助となり、また研究資料としても活用していただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から本書の刊行にいたるまで株式会社デンソー九州をはじめとする関係各位のご理解を賜り、ご協力をいただきましたことに対し厚く御礼申し上げます。

平成16年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 生田 征生

例　言

1. 本書は福岡市教育委員会が平成14年度に博多区山王2丁目17番2、44番において実施した比恵遺跡群第79次調査の発掘調査報告書である。
2. 遺構の実測は長家伸、坂本真一（現福岡県教育委員会）、北川貴洋が行った。
3. 遺物の実測は長家、吉留秀敏、坂本、犬丸陽子が行った。
4. 製図は長家、吉留、米倉秀紀、星野恵美、井上加代子が行った。
5. 写真は長家が撮影した。
6. 本書で用いる方位は磁北であり、座標北から 6° 西偏し、真北から $6^{\circ}18'$ 西偏する。なお座標は日本測地系を使用している。
7. 本書で用いる遺構番号は通し番号にし（一部欠番あり）、報告の際には遺構の性格を示す略号を付して表記している。略号は竪穴住居跡（S C）、掘立柱建物（S B）、井戸（S E）、土坑（S K）、溝（S D）、ピット（S P）、道路状遺構（S F）、道路状遺構内点圧痕跡群（S X）である。
8. 本書に関わる図面・写真・遺物等の全資料は福岡市埋蔵文化財センターで収蔵・保管されるので、活用いただきたい。
9. 本書の執筆はS E013出土石器を吉留秀敏が行い、他の執筆と編集は長家が行った。

遺跡調査番号	0233		遺　跡　略　号	HIE-79	
所　在　地	博多区山王2丁目17番2、44番			分布地図番号	37-0128
開　発　面　積	2,803m ²	調査対象面積	1,026m ²	調　査　面　積	880m ²
調　査　期　間	平成14年9月4日～平成14年12月4日			事前審査番号	14-2-148

本文目次

I	はじめに	1
1	調査にいたる経過	1
2	調査体制	1
II	調査の記録	1
1	調査の概要	1
2	遺構と遺物	7
1)	竪穴住居跡	7
2)	掘立柱建物	7
3)	井戸	10
4)	溝	37
5)	土坑	39
6)	道路状遺構	39
7)	小結	43

挿図目次

第1図	調査区位置図1（1／50,000）	2
第2図	調査区位置図2（1／4,000）	3
第3図	調査区位置図3（1／500）	4
第4図	調査区全体図（1／250）	5
第5図	調査区内遺構配置図（1／400） 及び地形断面図（水平方向は1／400、垂直方向は1／80）	6
第6図	A区南西壁土層図（1／60）	8
第7図	S C031・044実測図（1／40）	9
第8図	S C031出土遺物実測図（1／3、1／1）	10
第9図	S B040・041・042及び出土遺物実測図（1／50、1／3）	11
第10図	S E002・003及び出土遺物実測図（1／30、1／3）	12
第11図	S E004及び出土遺物実測図（1／30、1／3）	13
第12図	S E005及び出土遺物実測図（1／30、1／3）	14
第13図	S E006及び出土遺物実測図（1／30、1／3）	15
第14図	S E007・008・009実測図（1／30）	15
第15図	S E009出土遺物実測図（1／3）	16
第16図	S E010及び出土遺物実測図（1／30、1／3）	17
第17図	S E011及び出土遺物実測図（1／30、1／3）	18
第18図	S E012及び出土遺物実測図（1／30、1／3）	19
第19図	S E013実測図（1／30）	20
第20図	S E013出土遺物実測図1（1／1、1／3、1／4）	21
第21図	S E013出土遺物実測図2（1／3）	22
第22図	S E013出土遺物実測図3（1／3）	23

第23図	S E013出土遺物実測図 4 (1/3)	24
第24図	S E014・015・016及び出土遺物実測図 (1/30、1/3)	26
第25図	S E017及び出土遺物実測図 (1/60、1/3)	27
第26図	S E022・023及び出土遺物実測図 (1/30、1/3)	29
第27図	S E032及び出土遺物実測図 1 (1/30、1/3)	30
第28図	S E032出土遺物実測図 2 (1/4)	31
第29図	S E033及び出土遺物実測図 (1/30、1/3)	33
第30図	S E035及び出土遺物実測図 (1/30、1/3)	34
第31図	S E036・037及び出土遺物実測図 (1/30、1/3)	35
第32図	S E038及び出土遺物実測図 (1/30、1/3)	36
第33図	S D018出土遺物実測図 (1/3)	37
第34図	S D026・045及び出土遺物実測図 (1/40、1/3)	38
第35図	S K034及び出土遺物実測図 (1/40、1/3)	39
第36図	S D020杭位置図 (1/40)	40
第37図	S F027実測図 (平面1/120、断面1/60)	折り込み
第38図	S D020出土遺物実測図 (1/3)	41
第39図	S X021・025出土遺物実測図 (1/3)	42

写真目次

卷頭写真 1	S F027 (転圧痕)
卷頭写真 2	S F027内S D020土層
卷頭写真 3	S D020出土転用硯 (146)
卷頭写真 4	S E009出土瓦質土器 (30)

写真 1	調査地点より水域東門方向を望む	
写真 2	井戸枠木材 1	31
写真 3	井戸枠木材 2	31
写真 4	A区全景 (南西から)	44
写真 5	C区全景 (北から)	44
写真 6	B区南西半全景 (西から)	45
写真 7	B区北東半全景 (東から)	45
写真 8	S C031 (北から)	45
写真 9	S B041・042 (北から)	45
写真10	S E002 (西から)	45
写真11	S E003 (北から)	45
写真12	S E004 (東から)	46
写真13	S E005 (北から)	46
写真14	S E006 (西から)	46
写真15	S E008 (南から)	46

写真16	S E009（北から）	46
写真17	S E009遺物出土状況（西から）	46
写真18	S E010（北から）	47
写真19	S E011（北から）	47
写真20	S E012（南から）	47
写真21	S E013土層	47
写真22	S E013（西から）	47
写真23	S E014（東から）	47
写真24	S E015（南から）	48
写真25	S E016（東から）	48
写真26	S E017水溜め確認状況	48
写真27	S E022（南から）	48
写真28	S E023上層遺物出土状況（東から）	48
写真29	S E023（北西から）	48
写真30	S E032（東から）	49
写真31	S E032井戸側（北から）	49
写真32	S E032井戸側（東から）	49
写真33	S E032井戸側（南西から）	49
写真34	S E032完掘状況（東から）	49
写真35	S E033（西から）	49
写真36	S E035（東から）	50
写真37	S E036（東から）	50
写真38	S E037（北から）	50
写真39	S E038（北から）	50
写真40	S D001・018（南東から）	50
写真41	S D045（南から）	50
写真42	S F027（南西から）	51
写真43	S F027内S X021（南西から）	51
写真44	S F027内S D020土層1	51
写真45	S F027内S D020土層2	51
写真46	S F027内S D020・S X021（北西から）	51
写真47	S F027内S X021転圧痕（南東から）	51
写真48	S F027内S X021転圧痕除去後（南東から）	52
写真49	S F027内S X025南半転圧痕（南東から）	52
写真50	S F027内S X025北壁土層	52
写真51	S F027内S X025北壁土層（拡大写真）	52
写真52	出土遺物	52



写真1 調査地点より水城東門方向を望む

I はじめに

1 調査にいたる経過

平成14年6月6日付けで株式会社デンソーカー九州 代表取締役社長稻垣正樹氏より福岡市教育委員会宛に福岡市博多区山王2丁目17番2、44番の物件に関して、整備工場・駐車場・ショールーム建設に関わる埋蔵文化財事前審査申請書が提出された（事前審査番号14-2-148）。申請地は周知の埋蔵文化財包蔵地である比恵遺跡群（分布地図番号37-0128・遺跡略号H1E）に含まれている地点である。この申請を受けて埋蔵文化財課では申請者と協議の上平成14年7月2日に申請地内の試掘調査を行い、現況地表面から40～100cmほどの鳥栖ローム層上面で竪穴住居跡・ピット等の遺構を確認した。この結果を受けて埋蔵文化財課では申請者に対して遺構が存在する旨の回答を行い、その取り扱いについて協議を行った。その結果、建物の構造上遺構の破壊が避けられないため、平成14年度に発掘調査、平成15年度に資料整理・報告書作成を行い、記録保存を図ることで協議が成立了。

調査期間は平成14年9月4日～平成14年12月4日である（調査番号0233）。調査面積は880m²、遺物はコンテナ51箱分出土している。

現地での発掘調査にあたっては株式会社デンソーカー九州の皆様から発掘調査についてご理解頂くと共に、多大なご協力を賜りました。ここに記して謝意を表します。

2 調査体制

事業主体 株式会社デンソーカー九州

調査主体 福岡市教育委員会埋蔵文化財課

調査総括 埋蔵文財課課長 山崎 純男

調査第2係長 田中 寿夫

調査庶務 文化財整備課 御手洗清

調査担当 調査第2係 長家伸

調査作業 澄川アキヨ 中村フミ子 岩本三重子 越智 信孝 藤野トシ子 中村サツエ

藤野 幾志 西川シズ子 宮崎 幸子 近藤 誠一 斎野 孝子 坂本 真一

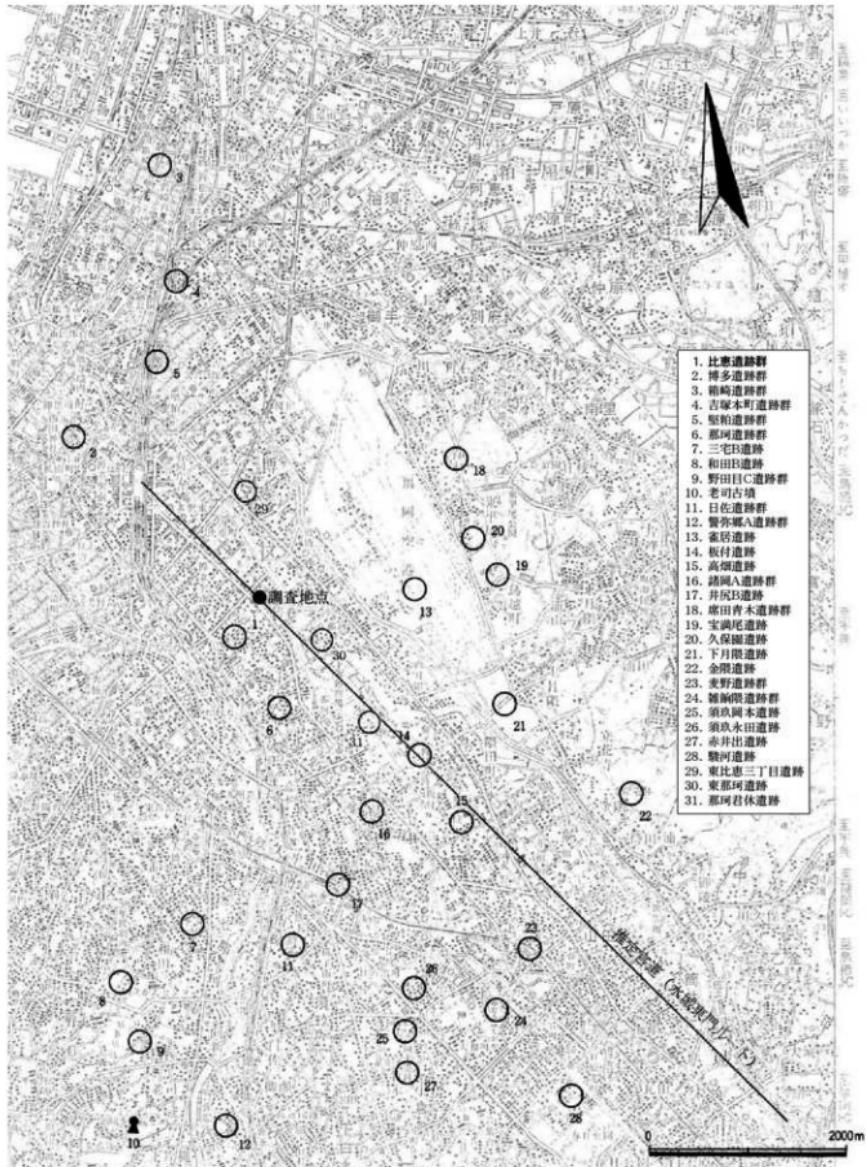
北川 貴洋 小田 裕樹 古澤 義久 下川 信弘

II 調査の記録

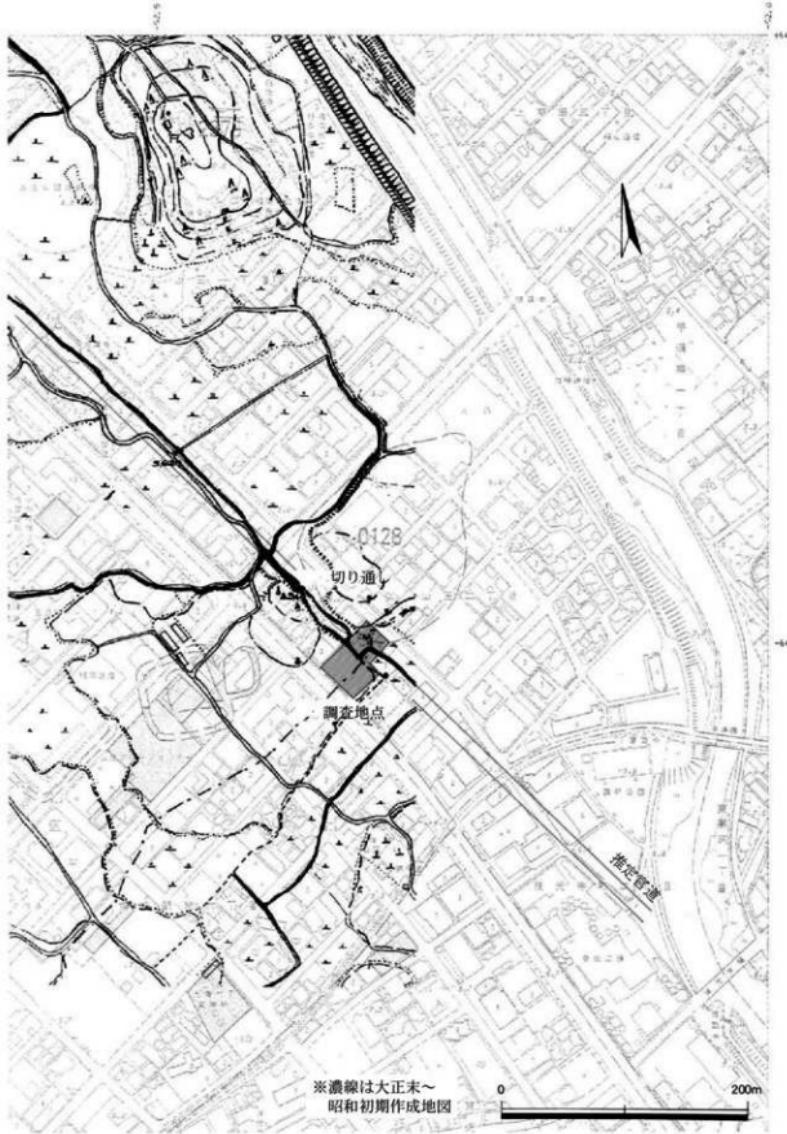
1 調査の概要

比恵遺跡群は福岡平野の中央部分を北流する那珂川と御笠川に挟まれた洪積丘陵上に立地する遺跡群である。丘陵の基盤層は花崗岩疊層で、この上面に阿蘇噴火火砕流・火山灰である八女粘土層・鳥栖ローム層・新期ローム層が堆積している。南側に隣接する那珂遺跡群とは一連の丘陵上の遺跡群を構成するものと考えられ、その範囲はあわせて南北2.4km、東西1kmに及ぶと考えられる。

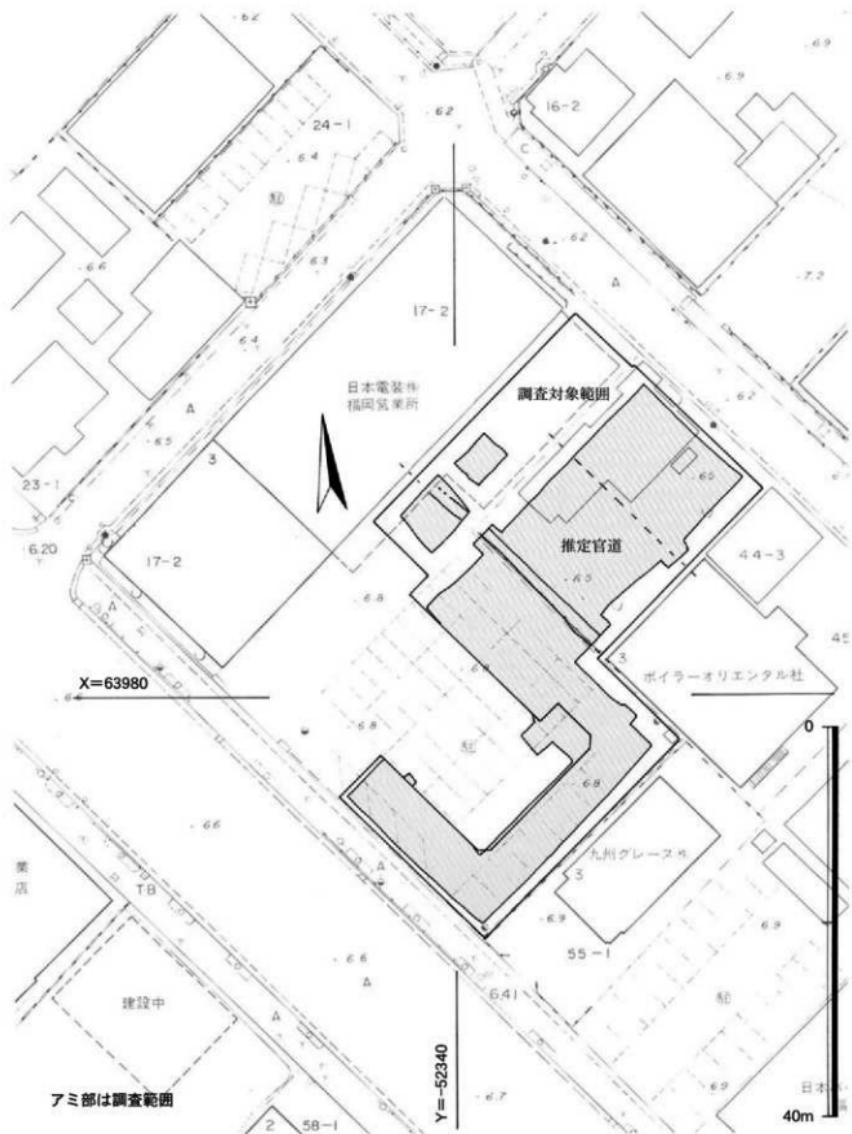
調査地点が位置する筑紫通り以東の地点は、これまで遺跡の存在は想定されていたものの範囲・内容等必ずしも明確でなく、比恵窯址として島状の丘陵が存在する可能性が考えられていた。しかし近年の試掘・調査成果により、比恵・那珂遺跡群と一連の丘陵上に立地することが明らかとなり、



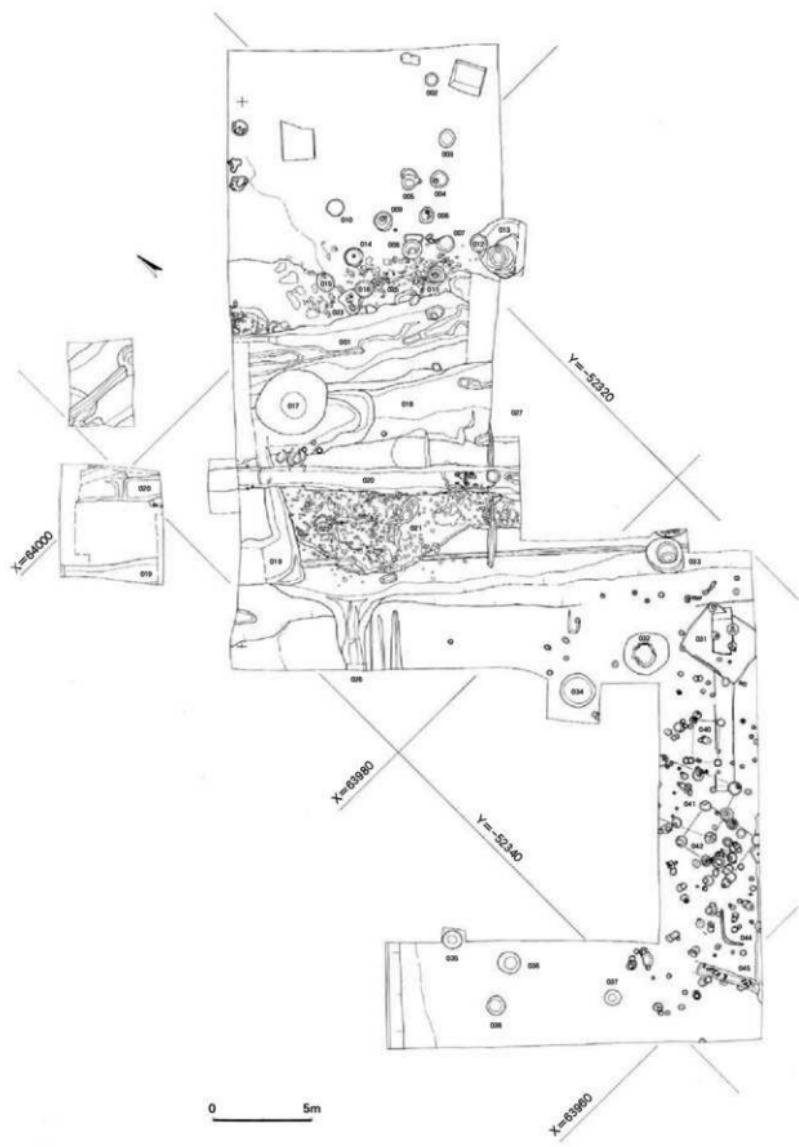
第1図 調査区位置図1 (1/50,000)



第2図 調査区位置図2 (1 / 4,000)



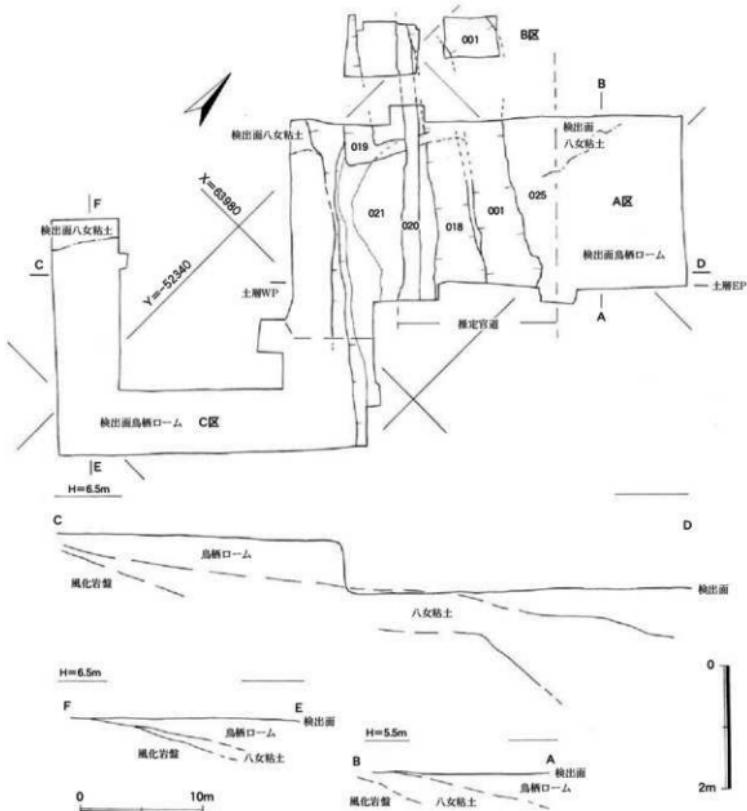
第3図 調査区位置図3 (1/500)



第4図 調査区全体図 (1/250)

特に比恵遺跡群は御笠川西岸までその範囲を広げることとなった。そのため今回の調査地点は旧来の遺跡範囲では比恵壇棺遺跡とされるところであるが、以上のような知見から比恵遺跡群の調査として行っている。また試掘調査以前から対象地は古代の官道として知られている「水城東門ルート」延長線上にあたり、その直進性から本地点での確認が想定された地点である。

調査地点は現況でアスファルト舗装された事業所内駐車場となっていた。対象地の現況標高は東～中央6.5m、西側6mである。調査は廃土処理及び事業工程の関係上3回に分けて行い、西側をA区、北側をB区、東側をC区と呼称した。本報告でもこの区割りを用いて説明を行うこととする。調査はA→B→C区の順に行った。表土除去は重機で行い、造成土及び旧耕作土除去直下のローム層上面が遺構面となる。C区は丘陵高位部となり標高5.9m前後である。A区南西側に1m程度の段落ちがありこれ以下は標高5m前後を測る。遺構面は盛土前の水田化によりかなり削平を受けているものと考えられる。



第5図 調査区内遺構配置図（1／400）及び地形断面図（水平方向は1／400、垂直方向は1／80）

えられ、高位部及び低位部のいずれもほとんど平坦となっている。ここで遺構面に露出しているローム層をみると、調査区北側に八女粘土層及び岩盤風化層が露出し、鳥栖ローム層と八女粘土層の境界が北東側及び南東側に向かって傾斜していることがわかる。これから復元すると本来の丘陵は、調査地点から東側の河川方向に傾斜すると共に、南東側に向かって緩やかに傾斜していたものと考えられる。このため現状では調査区南東側の遺構の残存状態が比較的良好で、削平がより進んでいる北西側高位部分では遺構がほとんど残っていないという結果となっている。

検出遺構は竪穴住居跡2棟、掘立柱建物3棟、井戸24基、道路状遺構1条、その他溝・土坑・ピットがある。削平のため遺存状態はあまり良好ではなく、井戸のような掘削の深い遺構が主体となっている。時期は弥生時代～中世に位置付けられ、特に弥生時代中期後半～後期の生活遺構及びこれに伴う遺物が主体を占める。また道路状遺構は「水城東門ルート」の延長にあたるもので、一方の到達地点とされる博多遺跡群の直近で確認されたことの意義は大きい。

2 遺構と遺物

1) 竪穴住居跡 (SC)

削平が進んでいるため竪穴住居跡は竪穴が確認できるものが1棟 (SC031)、壁溝の1部のみが残存しているもの1棟 (SC044) の2棟が確認されている。またC区の掘立柱建物周辺及び南西側では比較的掘り込みの深いピットがいくつか確認されている。まとめることはできなかったが、本来は竪穴住居跡が存在していたものと考えられる。

SC031 (第7図)

C区で検出する。3×3.6mの平面長方形を呈し、検出面から床面までの深さ25cmを測る。2本主柱と考えられ、共に径15cmの柱痕跡が残る。主柱芯々間は1mである。出土遺物は小破片のみであるが、弥生時代中期後半～後期初頭に位置付けられる。

出土遺物 (第8図) 1・2は甕である。いずれも口縁部は逆L字状を呈し、上面部は内傾する。2には胴部外面に縱方向の刷毛目が残る。また内面には板状工具によるナデの痕跡が認められる。3は支脚の裾部である。指頭痕跡が残る。4は黒曜石製の石鏃である。

SC044 (第7図)

C区南側で検出する。竪穴の西側コーナー壁溝部分のみを確認する。埋土は暗褐色である。主柱穴は不明であるが、SC031同様の2本主柱の可能性を考えられる。出土遺物はなく時期は不明である。

2) 掘立柱建物 (SB)

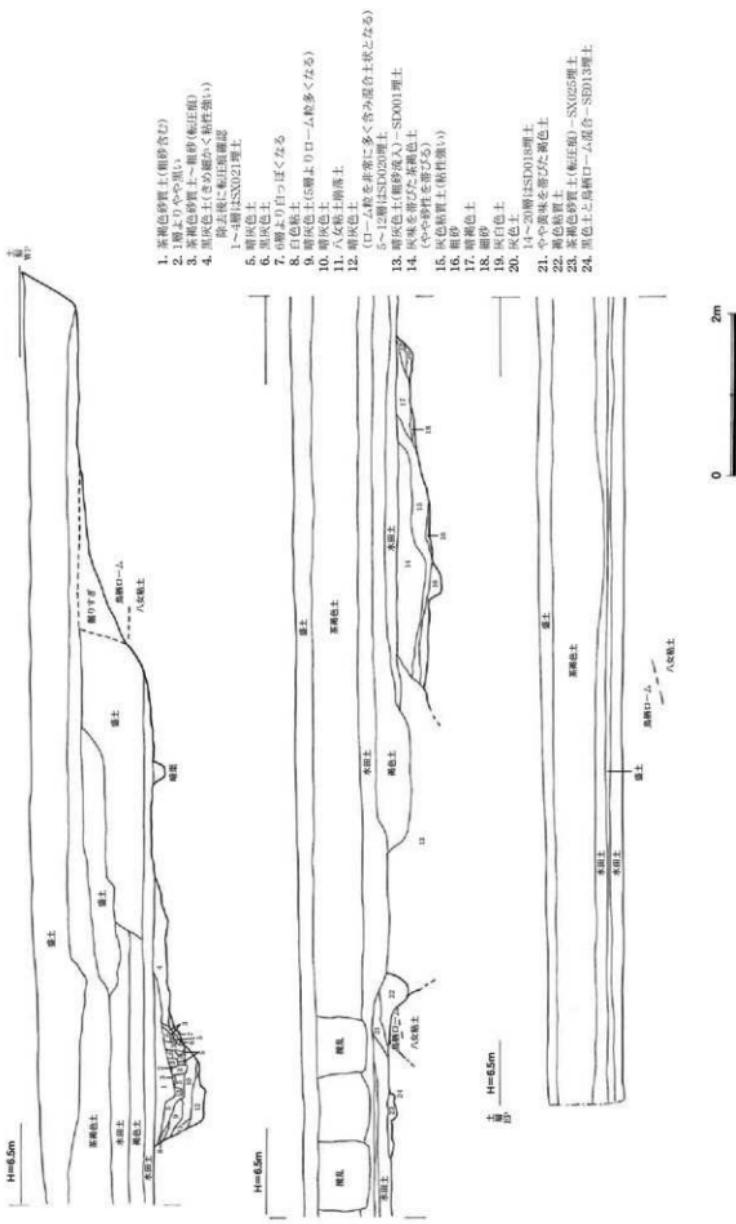
SB040 (第9図)

C区、SC031の西側で検出する。ピット埋土が黒褐色土ブロック混じりのにぶい褐色土でやや灰味を帯びており周囲のピットと埋土が異なるため、当初4本主柱の竪穴住居跡の残れと判断したが、埋土・出土遺物より中世前半代の掘立柱建物であると考えられる。主軸方位はN-53°-Eにとる。1×1間の建物か、他の柱が失われているかは不明である。出土遺物は土師器・須恵器・瓦器等が認められる。

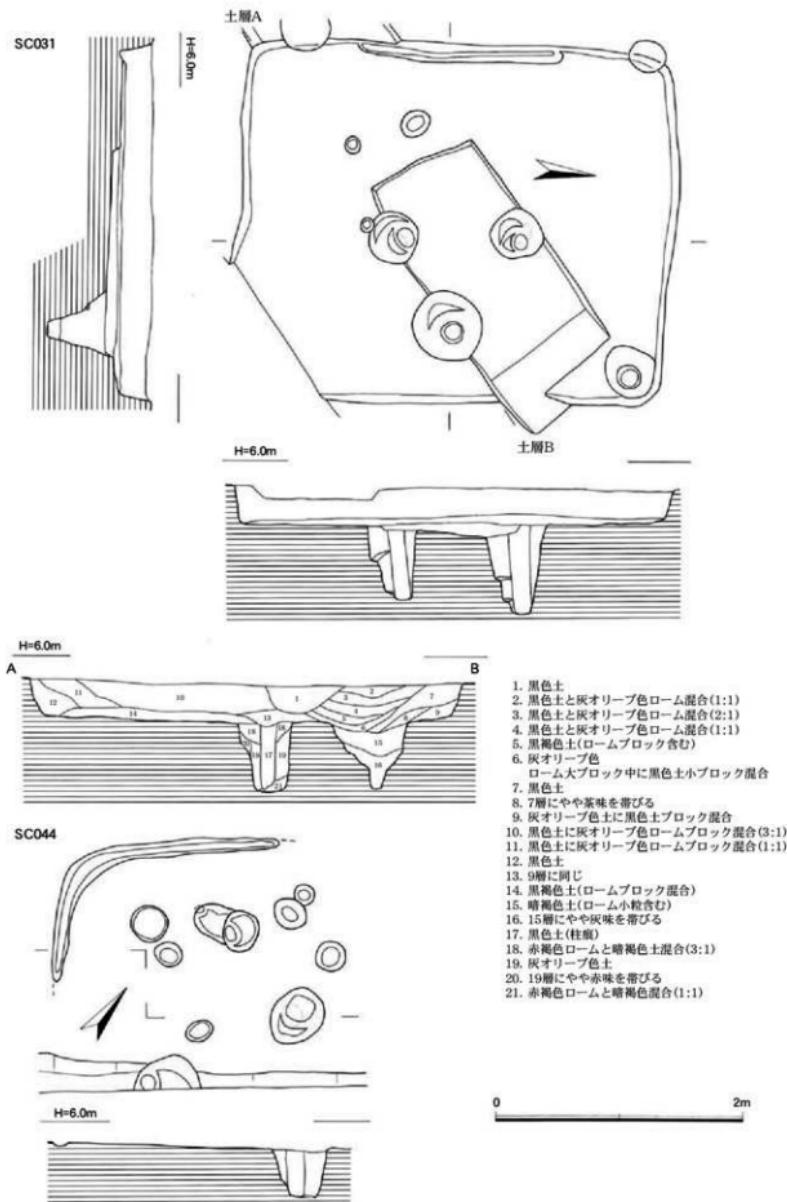
出土遺物 (第9図 5・6) 5は土師器小皿、6は瓦器碗の口縁部破片である。いずれも摩滅が著しく調整は不明瞭である。

SB041 (第9図)

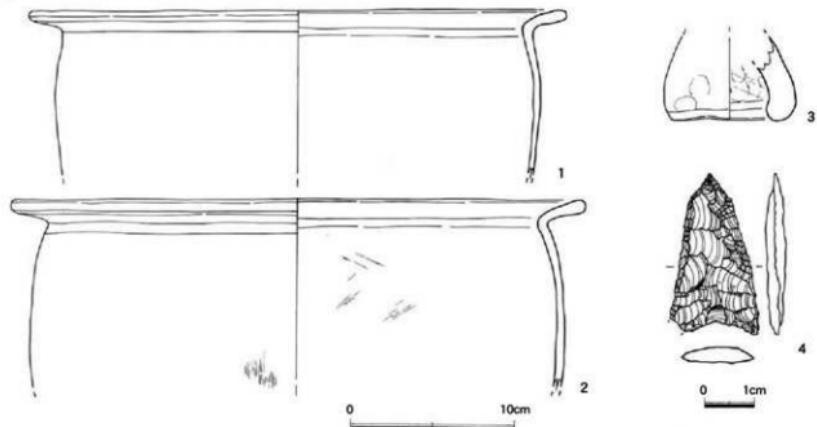
C区で検出する。北側は調査区外となるが1×2間の建物であろうか。柱穴の切り合い関係からSB041→SB042となる。主軸方位はN-17°-Wにとる。柱掘り方は径60cm前後の円形を呈し、



第6図 A区南西壁土壌図 (1/60)



第7図 S C031・044実測図 (1/40)



第8図 S C 031出土遺物実測図（1～3は1／3、4は1／1）

いずれも径15～20cmの柱痕跡が残る。出土遺物には土師器・須恵器の小破片があり、小田編年のⅢb～Ⅳ期に位置付けられる。

出土遺物（第9図 7） 7は須恵器壺蓋である。天井部外面には回転ヘラ削りを行う。屈曲部には浅い沈線を有し、口縁端部内面には僅かに段がつく。

S B 042（第9図）

C区で検出する。梁行き2.4m、桁行き3.2mを測る1×2間の掘立柱建物である。主軸方位はN-6°～Wにとる。柱掘り方は径50cm前後の円形を呈する。出土遺物は土師器・須恵器の小破片のみで、小田編年IV期に位置付けられる。

出土遺物（第9図 8～10） 図示し得たのは、須恵器の蓋杯類である。8は壺蓋で天井部外面に回転ヘラ削りを行う。9・10は蓋受けが短く内傾する壺身である。

3) 井戸（SE）

井戸は24基確認されており、弥生時代後期のものが主体を占める。この時期の井戸はA区北東部分及びC区西側の2箇所にまとまるが、共に帯状の配置を示している。

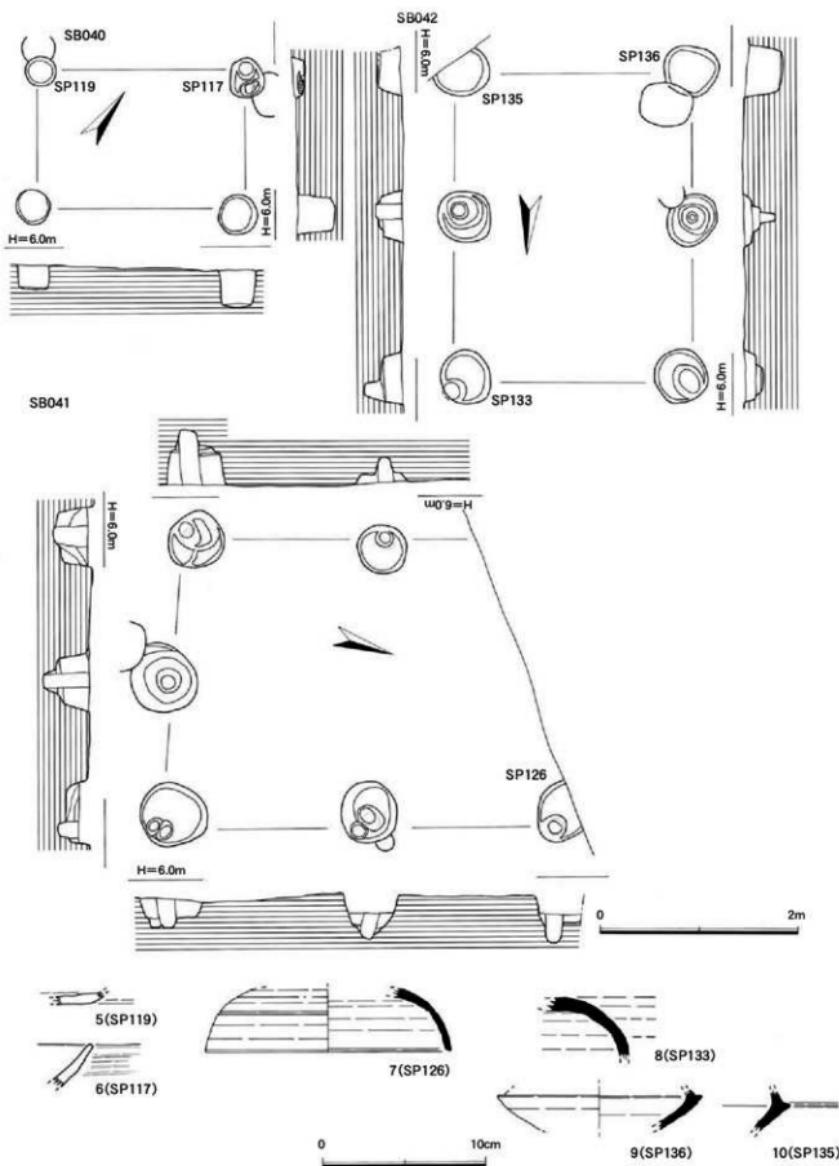
S E 002（第10図）

A区北東側で検出する。平面径70cmの円形を呈し、検出面からの深さ1mを測る。掘削は八女粘土層を20cm程掘り込んでいる。壁面に抉り込みは認められない。埋土は検出面から80cmはロームブロックを少量含んだ黒褐色土で、これ以下は灰白色砂質土である。出土遺物は小破片のみであるが、弥生時代後期の井戸である。

出土遺物（第10図 11） 11はく字状を呈する壺の口縁部である。胴部外面は縦刷毛、内面には横方向の刷毛目が行われている。

S E 003（第10図）

A区北東側で検出する。平面径80～90cmの略円形を呈し、検出面からの深さ85cmを測る掘削は



第9図 S B040・041・042及び出土遺物実測図 (1/50, 1/3)

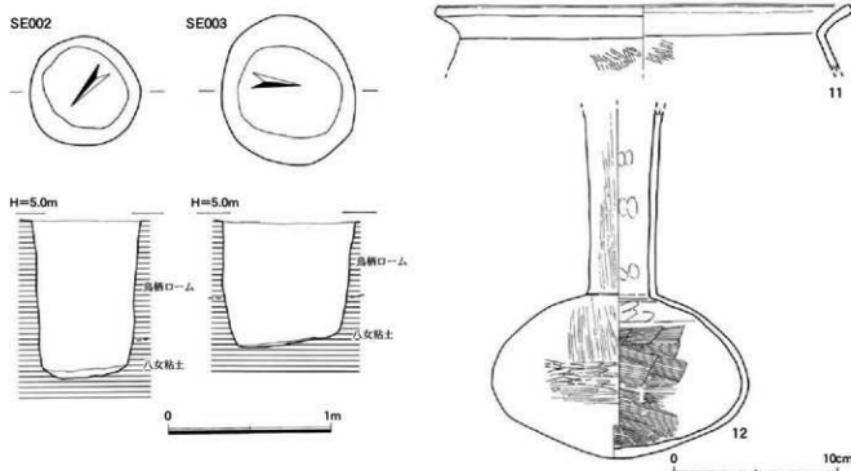
八女粘土層を30cm程掘り込んでいる。壁面に抉り込みは認められない。埋土は検出面から50cmは赤褐色土と橙白色土と暗褐色土の1:2:1混合土である(1層)。1層の下に厚さ10cmの黒色土(2層)が堆積し最下層は汚れた橙白色土である(3層)。1層は人為的な埋立て土、3層は自然崩落土と考えられる。2層は自然堆積土と考えられ、遺物はこの2層からのみ出土している。出土遺物は2層中から少量出土するのみである。

出土遺物(第10図 12) 12は偏球形の胸部に、筒状の頸部を有する長頸壺である。底部はやや張り出した丸底を呈する。頸部は外面縦方向の磨き、内面は縦方向のナデを行う。また胸部外面は刷毛目の後上半縦方向、中位は横方向の磨きを行う。下半は板状工具によるナデが行われ、小口痕跡が残る。内面は全体に刷毛目が残る。

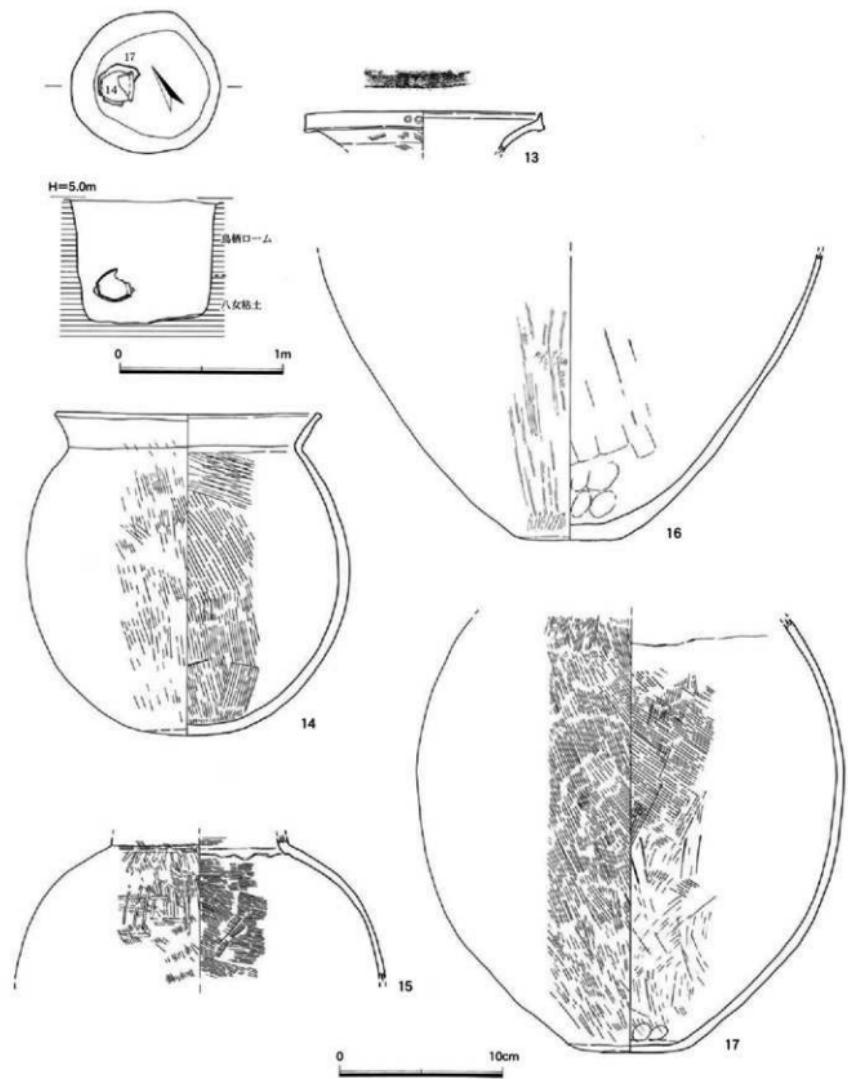
S E004(第11図)

A区北東側で検出する。平面径90cm前後の円形を呈し、検出面からの深さ80cmを測る。掘削は八女粘土層を30cm程掘り込んでいる。壁面に抉り込みは認められない。埋土は検出面から60cmはロームブロックを多く含んだ黒色土で、これ以下は赤褐色土である。床面から10cm程浮いて、ほぼ完形の甕(14)とこれに敷くように大きめの土器破片(17)が密着した状態で出土する。弥生時代後期後半に位置付けられる。

出土遺物(第11図) 13は壺の口縁部破片である。1/6程度を欠くが、端部外面に2個1組の円形文が刻まれる。14はほぼ完形の甕である。胸部は球形を呈し、底部も丸底に近いレンズ底である。頸部及び胸部下半1/3を除いて外面に煤が付着している。胸部調整は内外面縦刷毛による。15は直口壺の胸部上半である。外面は刷毛目の後縦方向の磨きが行われ、内面には横方向の刷毛目が残されている。16はレンズ状の底部を有する胸部下半である。外面は縦刷毛の後磨きを行い、内面は削りを行う。17は口縁部を欠く破片である。胸部中位に最大径を有し、レンズ状の底部である。内外面縦刷毛を施すが、内面下半には刷毛の後粗いナデを行っている。



第10図 S E002・003及び出土遺物実測図(1/30, 1/3)



第11図 S E004及び出土遺物実測図 (1/30, 1/3)

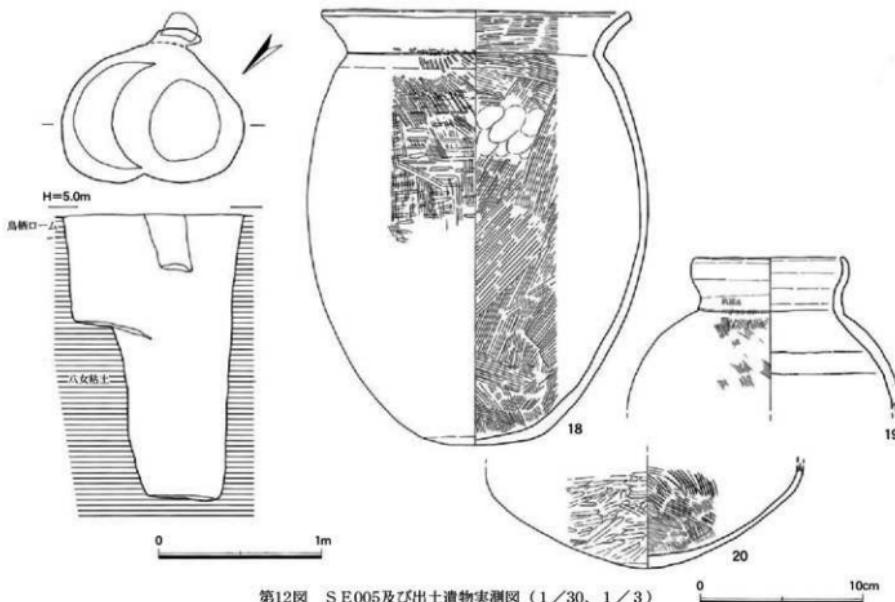
S E 005 (第12図)

A区北東側で検出する。東側に一段平坦面を有してあり長軸1.1m、短軸90cmを測る。検出面からの深さは1.8mで、鳥栖ローム層は検出面から15cmまで以下は八女粘土層を掘り込んでいる。壁面に抉り込みは認められないが、検出面上で南壁際に深さ35cmの抉り込むような掘り込みが確認されている。埋土は平坦面まではロームブロックを含む黒色土で、これ以下はロームブロックの少ない黒色土である。なお上層埋土で切り合はれは確認できておらず、一連の掘り込みであると考えられる。遺物の大半は下層出土である。また底面から10cm程浮いて大破片となる甕(18)が出土している。弥生時代後期後半に位置付けられる。

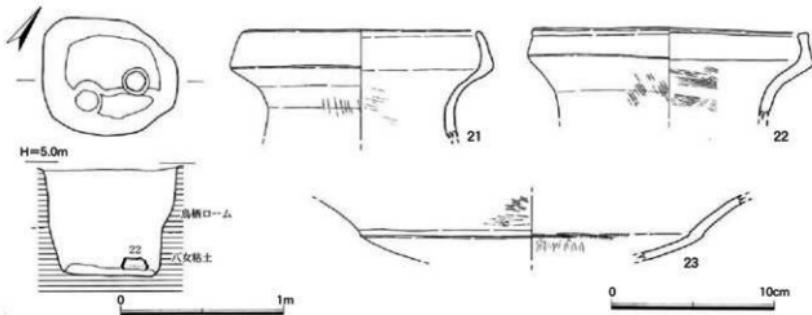
出土遺物(第12図) 18はほぼ完形に復元できる甕である。口縁部はやや外反するく字状を呈し、底部はレンズ状である。また胸部最大径は中程にあり、均整のとれた長球形を呈する。胸部外面は叩きの後下半部分はナデ消し、上半部分は縱刷毛を行う。内面は全体に刷毛目が残る。19は袋状の口縁部を有する壺である。胸部外面には縱刷毛が残り、内面はナデによる。20は壺の下半部である。内面は内底面を中心に螺旋状に刷毛目を施す。外底面はヘラ削りによりやや突き出た丸底に整形し、胸部にはナデの後に磨きを行う。

S E 006 (第13図)

A区北東側で検出する。平面70×80cmのやや歪な方形を呈し、検出面からの深さ65cmを測る。掘削は八女粘土層を30cm程掘り込んでいる。壁面に抉り込みは認められない。埋土はロームブロックを多く含む黒褐色土である。床面から5cm程浮いて、周囲する壺口縁部(22)が倒置されている。



第12図 S E 005及び出土遺物実測図 (1/30, 1/3)



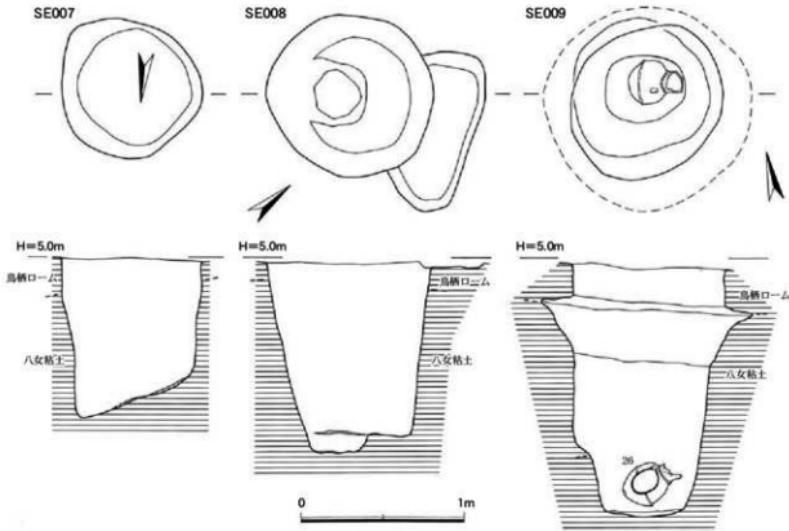
第13図 SE006及び出土遺物実測図 (1/30, 1/3)

弥生時代後期後半に位置付けられる。

出土遺物 (第13図) 21・22は複合口縁壺の口縁部である。21は口縁部上端が内湾気味に立ち上がり、22は比較的直立し端面は面取りを行っている。21は頸部外面に縦刷毛を行うほかは、横方向のナデによる。また22は頸部外面に縦刷毛、内面には横刷毛が残っている。23は高坏である。摩滅が進んでいるが、外面に横方向の刷毛目が認められる。また内面屈曲部には幅3.2cmの板状工具小口痕が残り、坏部下半には縦方向の磨きが行われている。

S E007 (第14図)

A区北東側で検出する。平面径85cmの歪な円形を呈し、検出面からの深さ1mを測る。掘削は八

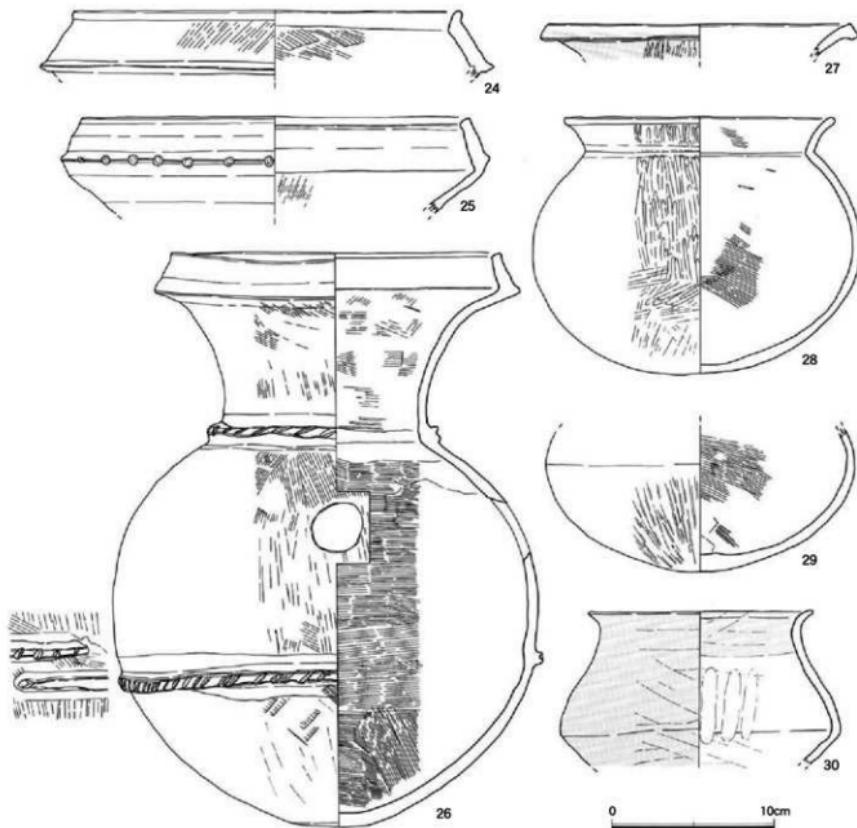


第14図 SE007・008・009実測図 (1/30)

女粘土層を80cm程掘り込んでいる。壁面に抉り込みは認められない。底面は西側が高くなり、東側がこれより25cmほど深くなっている。埋土は検出面から60cmはロームブロックを極少量含んだ黒色土（1層）で、これ以下は八女粘土と灰色砂質土の混合土（2層）である。出土遺物は1層から3点ほど出土するのみである。胸部の内面はナデで、丹塗り土器と考えられる破片が出土しており、SE008と類似した時期であろうか。

S E008 (第14図)

A区北東側で検出する。平面径1mの円形を呈し、検出面からの深さ1.2mを測る。掘削は八女粘土層を1m程掘り込んでいる。掘り込みは比較的斜めに行われ、壁面に抉り込みは認められない。底部付近で平坦面を有し、西側が更に10cm程深く掘り下げられている。埋土は検出面から1mは鳥栖ローム・八女粘土ブロックと黒色土の混合で人為的な埋め戻しが行われたものと考えられる。以下は



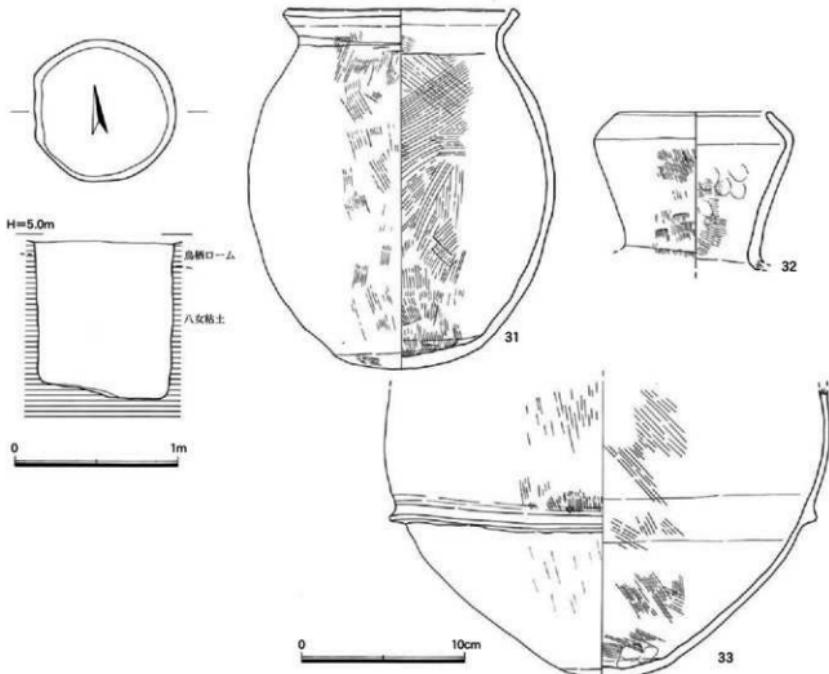
第15図 S E009出土遺物実測図 (1/3)

灰白色砂質土である。出土遺物は小破片のみで時期不明であるが、甕破片が内面ナデを行ったものであり、丹塗り土器が見られることから弥生時代中期後半～後期初頭の幅で考えておきたい。

S E009 (第14図)

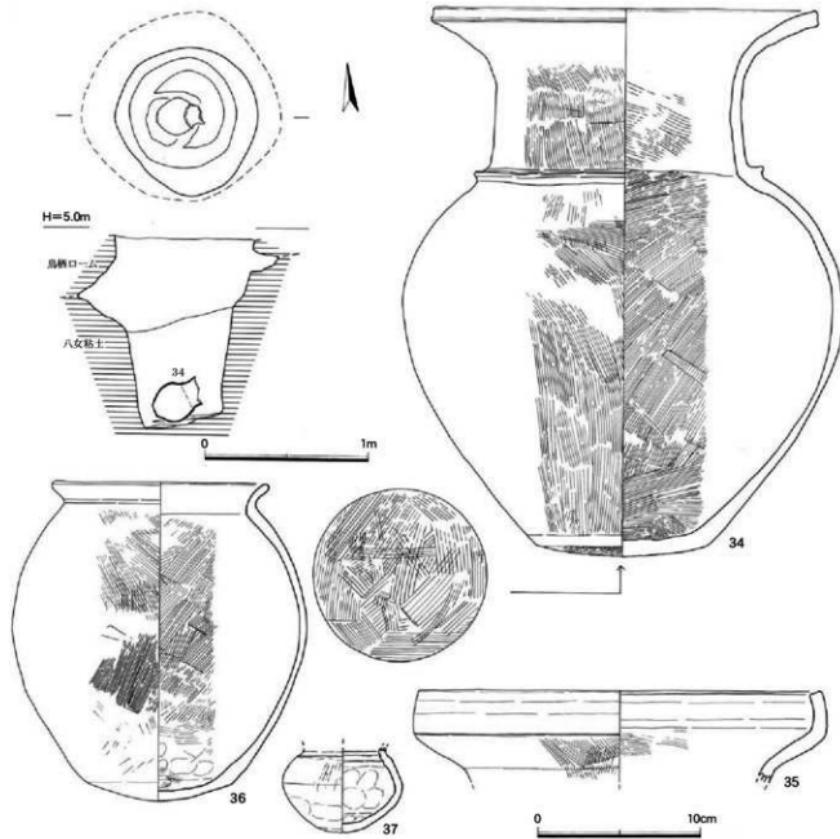
A区北東側で検出する。平面径80cm前後の円形を呈し、検出面からの深さ1.6mを測る。壁面は鳥栖ローム層と八女粘土層の境で20cm程抉り込んでいる。埋土は検出面から60cmはロームブロックを多く含んだ黒色土で、これ以下はロームをほとんど含まない黒色土で自然の木片を多く含んでいる。床面から10cm程浮いて、口縁部を欠く壺が出土している。この壺の胴部には焼成後の穿孔が認められる。弥生時代終末期に位置付けられる。

出土遺物（第15図） 24～26は複合口縁壺である。24は端面をつまみ上げるように面取りを行い、内外面には刷毛目を残す。25は端面を四角く納め、屈曲部外面には押圧による刻みを施す。内面に刷毛目が残る。26は完形品で、胴部に外面から焼成後の穿孔を行う。胴部は球形に近く、底部は小さなレンズ状を呈する。頸部および胴部に1条ずつの突帯を有する。突帯には押圧による刻みを施す。また胴部突帯は周回する部分で互い違いとなる。外面は頸部以下に縦刷毛を行い、頸部は部分的にナデ消している。また胴部は刷毛の後に縦方向の磨きを行なうが、突帯より上部では粗い磨きで刷毛が多い。

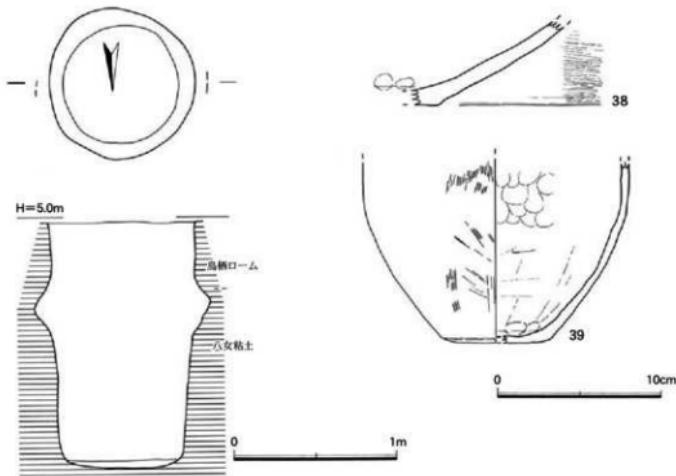


第16図 S E010及び出土遺物実測図 (1/30, 1/3)

く残るが、突帯以下底部までは緻密な磨きとなってほとんどが消えている。内面はほぼ全面に刷毛目が残っている。27は口縁端部外面が垂下する口縁部である。内面横ナデ、外面縦方向の磨きを行う。また端部外面から黒色顔料が塗布されている。28は球形胸部を呈する丸底の壺である。口縁部～胴部外面には丁寧な磨きが行われるが、部分的に胴部に刷毛目が残っている。口縁部内面は刷毛目の後横方向の磨き、胴部内面は刷毛目の後ナデが行われている。また内面は焼成時の炭素の吸着により黒色化している。29は28と同様の器種の胴部であろう。外面には縦方向の緻密な磨きが認められる。30は瓦質土器小形壺（袋状壺）である。胴部最大径部位から口縁部までは僅かに内湾気味に内傾し、口縁端部は外反する。また胎土は精選されている。破断面をみると内面はにぶい橙色であるが、外面は灰白色の還元色を呈する。調整は横ナデを主体とし、内面中位には指頭痕が残る。また外面～口縁部内面には黒化処理を施している。



第17図 SE011及び出土遺物実測図 (1/30, 1/3)



第18図 SE012及び出土遺物実測図 (1/30, 1/3)

S E010 (第16図)

A区北東側で検出する。平面径90cm前後のやや歪な円形を呈し、検出面からの深さ95cmを測る。掘削は八女粘土層を80cm程掘り込んでいたが壁面に抉り込みは認められない。底面には凹凸は見られないが、東側に向かって深くなっている。埋土は検出面から60cmは八女粘土ブロックを多く含んだ黒色土で、これ以下は灰色砂質土である。またこの間の壁際に橙色のローム崩落土が部分的に堆積している。弥生時代後期後半～終末に位置付けられる。

出土遺物（第16図） 31は壺である。口縁部はく字状に屈曲するが、稜線は不明瞭である。底部はレンズ状を呈する。内外面刷毛目を施すが、外面は刷毛目の後に板状工具によるナデに近い削りを行っている。32は袋状に口縁部が内側に屈曲する壺の口縁部である。内外面に刷毛目が認められる。33は小さいレンズ底を有する底部である。胸部にコ字状の突帯を貼り付けている。内外面に刷毛目を行うが、突帯以下は縦方向のナデが行われる。

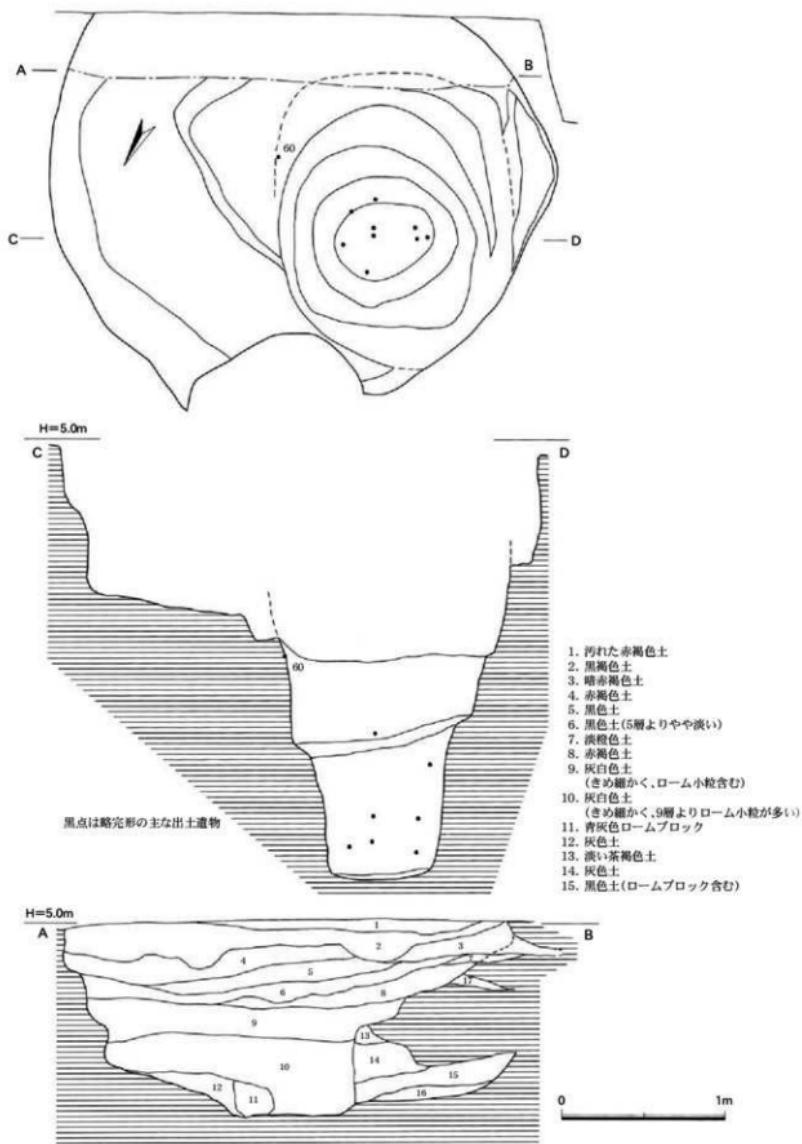
S E011 (第17図)

A区北東側で検出する。平面径90～95cmの円形を呈し、検出面からの深さ1.2mを測る。壁面はやや斜めに掘り込まれ、底面近くで平坦面を有する。掘削は八女粘土層を80cm程掘り込んでおり、鳥栖ローム層との境で20cm前後抉り込んでいる。埋土は黒色土である。底面付近で口縁部を欠く壺（34）と略完形の小型壺（37）が出土する。弥生時代後期後半に位置付けられる。

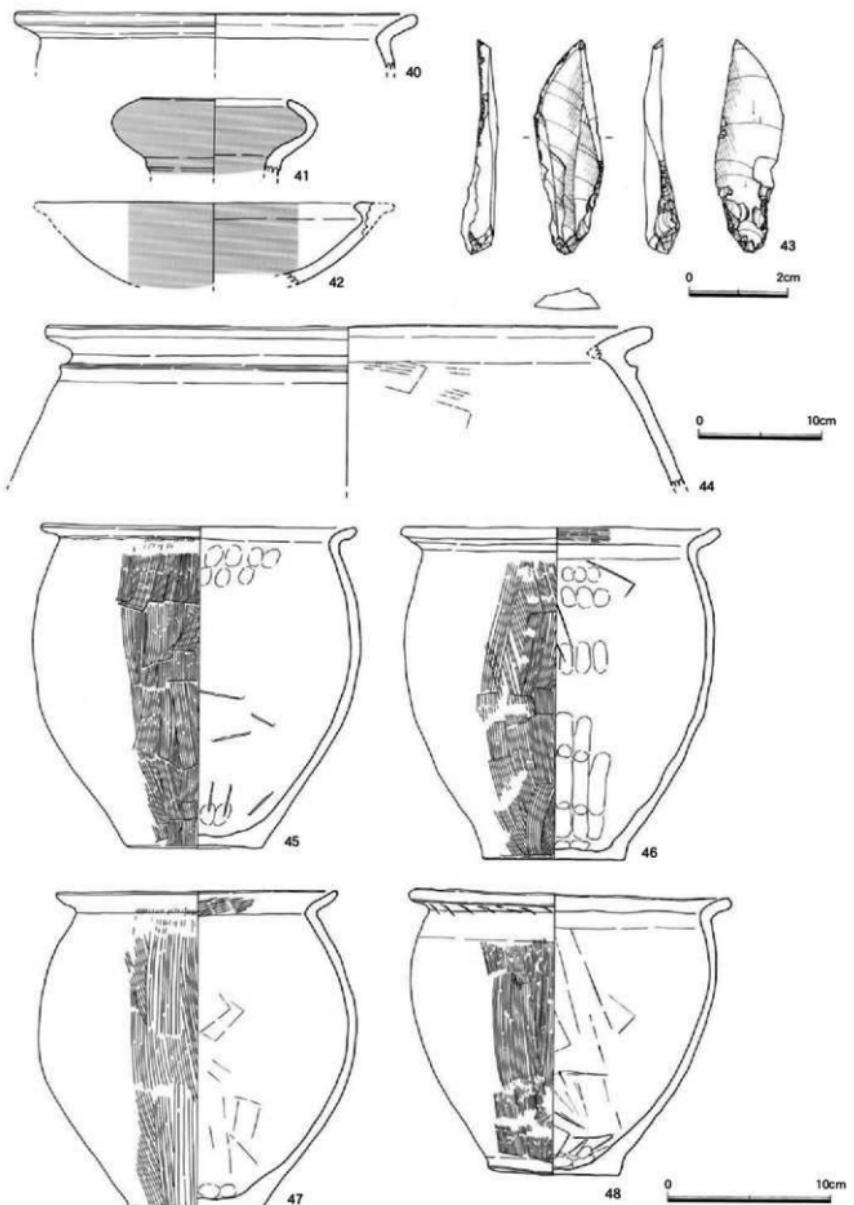
出土遺物（第17図） 34は出土時には口縁部を欠いていたが、接合部分が存在し完形に復元できる。口縁部はハ字状に開く。頸部には突帯を有し、胸部や上位に最大径を有する。底部はレンズ状を呈し、刷毛目による調整が行われる。また頸部～胸部にも内外面全体に刷毛目が施されている。35は複合口縁壺の口縁部である。端面は面取りを行っている。36は壺である。胸部外面上半は刷毛目を残し、下半はナデ消している。37は口縁部を欠く小型の壺である。底部は小さなレンズ状を呈し、胸部外面には磨きを行う。

S E012 (第18図)

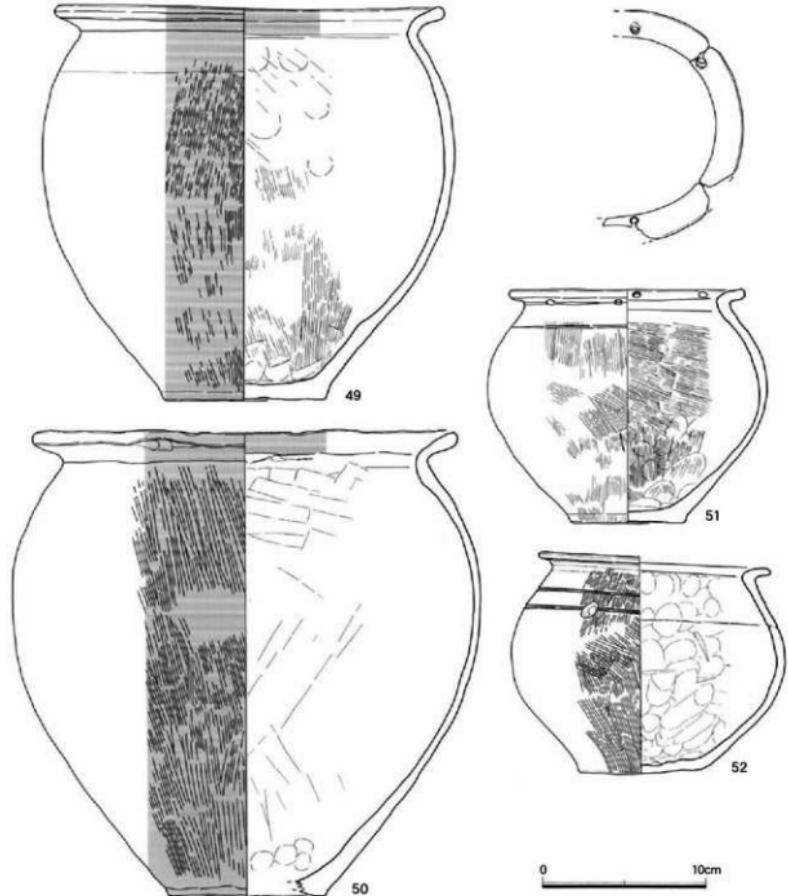
A区北東側で検出し、SE013の豊穴部分を切る。平面径90cm程の円形を呈し、検出面からの深



第19図 S E013実測図 (1 / 30)



第20図 S E 013出土遺物実測図 1 (43は1／1、40～42・45～48は1／3、44は1／4)



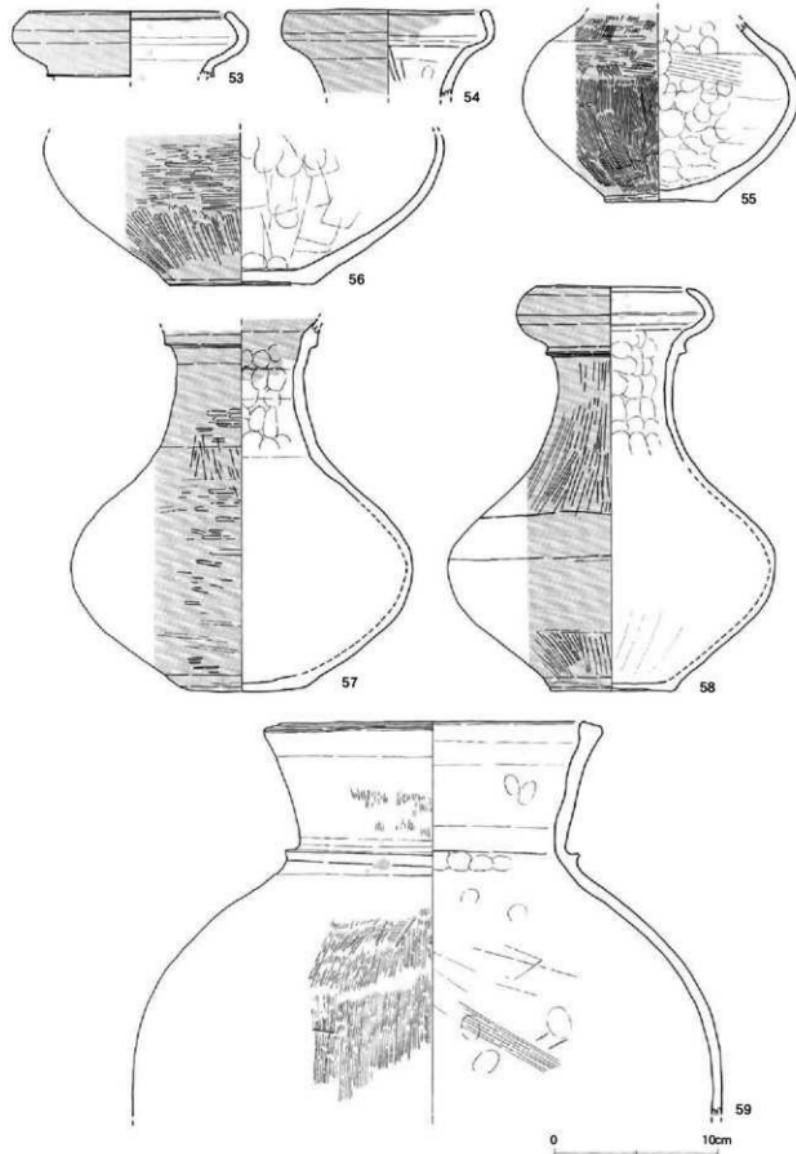
第21図 S E013出土遺物実測図2 (1/3)

さ1.5mを測る。掘削は八女粘土層を1m程掘り込んでおり、鳥栖ローム層との境で10cm前後抉り込みが残る。埋土は検出面から1mまではロームブロックを含んだ黒色土で、それ以下は黒色土を混合した青灰色土である。出土遺物には自然木を多く含み、弥生時代後期中頃～後半に位置付けられる。

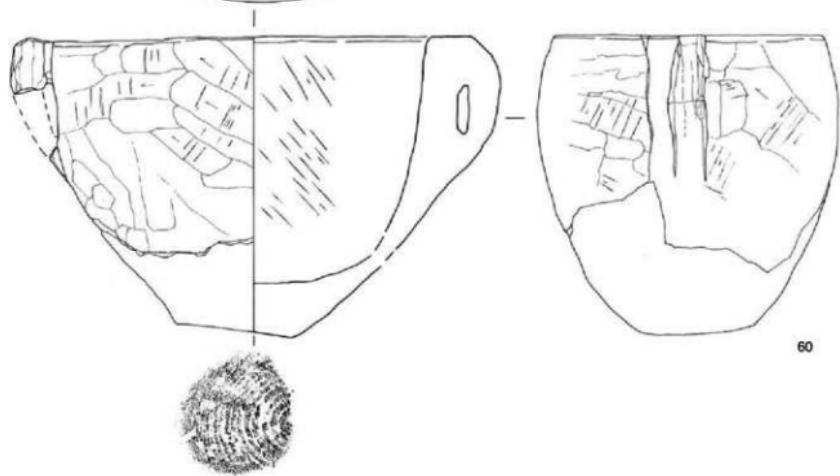
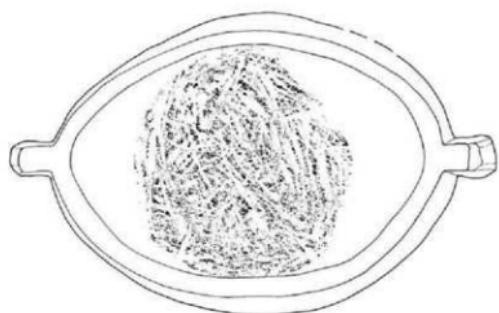
出土遺物（第18図） 38は壺の底部破片である。外面には磨きが行われる。39は甕の下半部である。底部はレンズ状を呈し、外面は刷毛の後粗いナデを行う。内面は粗いナデ調整を行い、底面付近には炭化物が付着している。

S E013 (第19図)

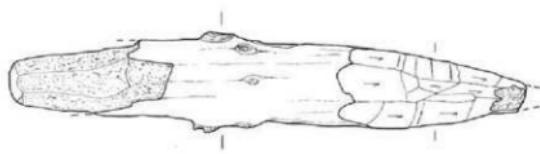
A区北東側で検出する。検出時にはややプランにわかりにくい部分があったが、方形土坑と考えて



第22図 S E013出土遺物実測図3 (1 / 3)



60



61

0 10cm

第23図 SE013出土遺物実測図4 (1/3)

掘り下げを行った。土坑の壁は階段状に掘り込まれており、埋土は上層（1～8層）、下層（9～12層）に分けることができる。なお西側壁面は壁面から水平方向に大きく抉り込む部分がある。埋土は上層下半部（5層以下）から水分を多く含んだものとなり、掘削中に泥質化したため土層観察が非常に困難な状態となった。また下層は壁面の八女粘土層との区別が困難であった。この掘り下げの最終段階で土坑西寄りに円形の黒色土部分が確認できた。平面的には土坑の埋土を切っているようでもあったが、上述のように埋土が泥質化しており明らかでない。この黒色土部分を掘り下げるとき井戸状の掘り込みとなっており、この部分の掘り下げを同時に実行した。井戸部分は検出面からの深さ2.6mを測る。底面から90cmのところで段がつき、ここから底面までの間で投棄された土器が9個体出土している。また標高3.6mのところで木製容器が1個体出土している。

なお方形土坑部分は井戸部分との切り合いとも考えられるが、分別して取り上げている上層出土遺物との間に明確な時期差は見られない。弥生時代中期後半に位置付けられ、ここでは一連の遺構として報告しておく。

出土遺物（第20～23図） 40～43は上層（1～8層）出土遺物である。40は甕の口縁部である。口縁部上面は内傾する。41・42は丹塗り土器である。41は袋状口縁壺、42は高壺である。43はナイフ形石器である。石材は漆黒色弱透明黑曜石で表面は僅かに風化が進む。ほぼ完形で長さ4.4cm、幅1.4cm、厚さ0.7cmである。素材は縦長剥片で、背面に先行する4面の剥離面と右側にボジ面がある。分割もしくは剥片素材の単設打面石核とみられる。二次調整は打面を基部とし下端の一側縁と裏面に施し、素材形状を大きく変形しない。先端に近い左側縁に微細剥離がある。後期旧石器時代後半期のなかで新相に位置づけられる。

44以下は井戸部分で出土したものである。44は中型の甕である。口縁部は内傾し、頸部に1条三角形の突帯を有する。45～48はいずれも投棄されたほぼ完形の甕である。平底で胴部最大径はやや上位に有する。口縁部はく字状に屈曲し、上面は内傾する。胴部調整は外面縦刷毛の後、頸部付近に横ナデを行う。内面は指ナデ及び板状工具によるナデが行われ、小口痕跡が残っている。49・50は丹塗りの甕である。現状では顔料の剥落が著しくほとんどが剥がれ落ちている。49の内面調整は底部が指押さえ、胴部下半が縦刷毛、上半は板状工具によるナデ状となっている。50は内面ナデを行うが、頸部付近は削り状の痕跡となる。51・52は無顔甕である。51には口縁部に穿孔が行われる。外面は共に縦刷毛、内面は51には刷毛目が残り、52は指ナデ痕跡が明瞭である。53～58は丹塗りの袋状口縁壺である。調整は上位及び下位が縦方向、中位が横方向の丁寧な研磨が主体であるが、55の胴部は縦刷毛が明瞭に残り、磨きは行われていない。また56は底部外面まで丹塗りが行われている。59は直口壺である。外面に飛沫状に赤色顔料が付着する。60は把手付容器である。芯持ち材を上面からくり抜き、2ヶ所に把手を削り出す。把手には縦長の孔を穿つが孔中に使用時の擦痕・磨滅は認められない。61は杭である。

S E014（第24図）

A区北東側で検出する。平面径95cmの円形を呈し、検出面からの深さ70cmを測る。掘削は八女粘土層を50cm程掘り込んでおり、鳥栖ローム層との境で10cm程抉り込んでいる。埋土は検出面から40cmまでは鳥栖ローム・八女粘土・黒褐色土の混合土で、以下は灰色土に白色土をブロック状に含むものである。底面直上から壺が正位置で出土する。弥生時代後期～終末のものであろう。

出土遺物（第24図 62） 62はほぼ丸底を呈する直口壺である。摩滅が進むが胴部内外面に刷毛目が残っている。色調は明橙色を呈し、径2mm前後の砂粒を多く含んでいる。

S E015（第24図）

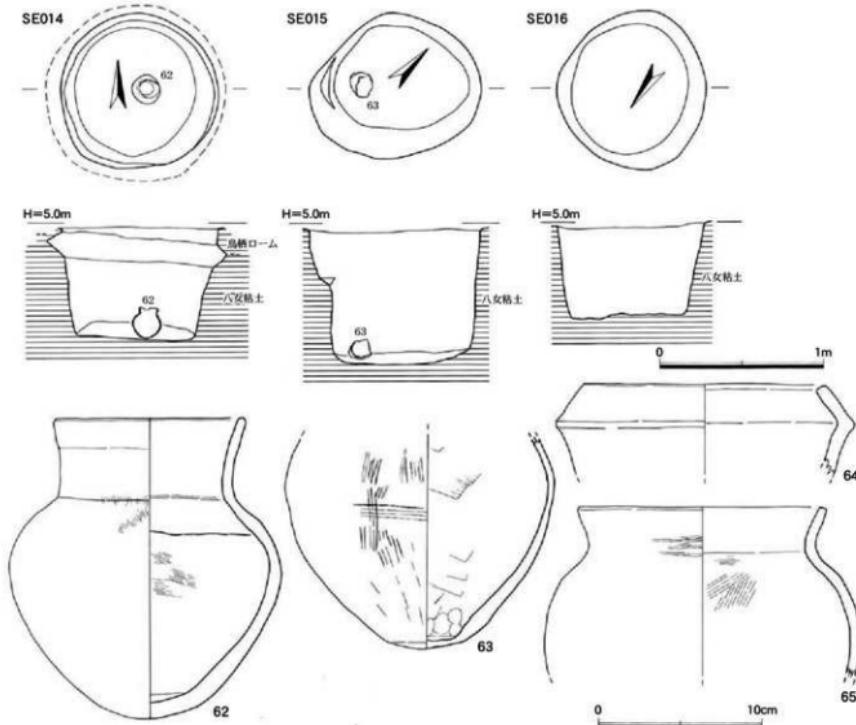
A区北東側で検出する。 $0.9 \times 1.05\text{m}$ の楕円形を呈し、検出面からの深さ80cmを測り、南側壁面に一段平坦面を有する。検出面はすでに八女粘土が露出している。埋土は検出面から60cmまでは鳥栖ローム大ブロックを含む黒褐色土で、以下はロームを含まない黒色土である。底面付近で壺下半部が出土する。弥生時代後期～終末に位置付けられる。

出土遺物（第24図 63） 63は胸部下半である。底部は小さなレンズ状に作り出している。外面は刷毛を行うが、底部付近はこの後ケズリによる調整を行っている。内面はナデにより、小口痕跡が多く残っている。

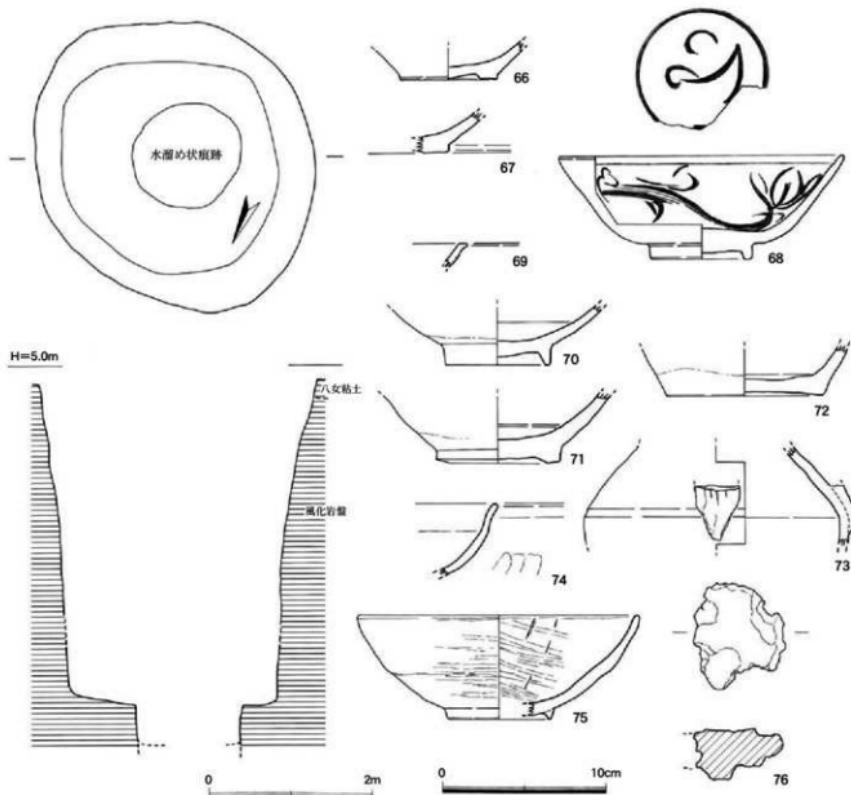
S E016（第24図）

A区北東側で検出し、S E023を切る井戸である。平面径90～95cmの円形を呈し、検出面からの深さ50cmを測り、底面は東～南がやや高くなる。埋土は八女粘土ブロックを多く含む黒褐色土である。弥生時代後期に位置付けられる。

出土遺物（第24図 64・65） 64は複合口縁壺の口縁部である。口縁端部は四角く収めている。



第24図 S E014・015・016及び出土遺物実測図 (1/30, 1/3)



第25図 S E017及び出土遺物実測図（1／60、1／3）

65は直口壺の上半部である。内外面に粗い刷毛目が残っている。

S E017 (第25図)

A区中央で検出する。切り合い関係は S E017→S D018→S D001となる。平面径 $3.3 \times 3.8\text{m}$ の椭円形を呈する。検出面は八女粘土層であるが、20cm程度で風化岩盤となっている。埋土は褐色土・黒色土・ロームが2:2:1程度で混合した人為的な埋め戻し土である。水分を多く含み粘性が非常に強くなっている。壁は垂直に近く掘り込まれていたため、崩落の危険があり中途から重機による掘り下げを行った。この結果検出面から4m(標高0.4m)まで掘り下げを行っている。この底面で径1.3mの円形を呈する水溜め状の掘り方が確認できたため、本遺構を井戸と判断した。なお掘り方に木組みもしくは瓦組み等の構造は確認できなかった。この後これ以上の掘り下げが不可能であったため、最終的な掘り方は確認できていない。なお水溜め状の掘り込みから井戸と判断しているが、本遺構は岩盤を掘り下げているため、掘削が非常に深いにもかかわらず水は僅かにしみ出るのみで、井戸

としての機能にはやや問題も感じられる。12世紀代と考えられる。

出土遺物（第25図） 66・67は越州窯系青磁碗である。いずれも底部破片である。66は輪状高台を有し、全面に施釉されている。67は蛇の目高台である。2次的な被熱により、釉が剥落している。68は龍泉窯系青磁碗である。内面に片彫りの花文を有する。高台疊付きまで施釉する。69～72は白磁である。69は口縁部破片である。端部を外方に嘴状に引き出す。70・71は碗の底部である。高台部分は70は細く直立し、71は削り出しが浅い。いずれも施釉は体部下半までである。72は壺の底部である。73は縦耳を有する陶器壺である。74は土師器椀の口縁部破片である。75は瓦器椀である。型押しの後磨きを行う。内面には当て具痕跡が残る。76は楕円形鍛治溝である。底面に一部炉壁粘土と砂粒が付着する。

S E022（第26図）

A区南西側、S F021転圧痕除去後に確認する。平面径65cmの円形を呈し、検出面からの深さ75cmを測る。埋土上層には道路状遺構に伴う転圧痕（2層）が残る。このため検出レベルから15cm程の埋土中から青磁破片が出土するが、これは転圧によりもぐりこんだものと考えられ、道路状遺構に伴う遺物であると考えられる。3層中から瓦器椀（78）が出土しているが、形状・埋土からは弥生時代の井戸の可能性が高い。

出土遺物（第26図 77・78） 77は青磁碗である。外底面まで全面に施釉し、高台疊付きのみ露胎となる。78は摩滅の進む瓦器椀底部破片である。

S E023（第26図）

A区北東側で検出する。S E023→S E016となる。長軸1.3mを測り、検出面からの深さ1.4mを測る。検出面から40cm程に平坦面を有し、この直上から略完形の甕（79）が出土する。また図示していないがこの甕の直下からも土器が数点（80～82）まとまって出土している。またここから井戸状に掘り込みを有し、底面直上から壺（84）、50cm程浮いて甕（83）が各1個体出土している。埋土は黒褐色土である。以上の出土遺物をみると当初弥生時代後期初頭に位置付けられる井戸が埋没した後、これに切り合う、後期後半の掘り込み（井戸）が掘削されたものと考えられる。

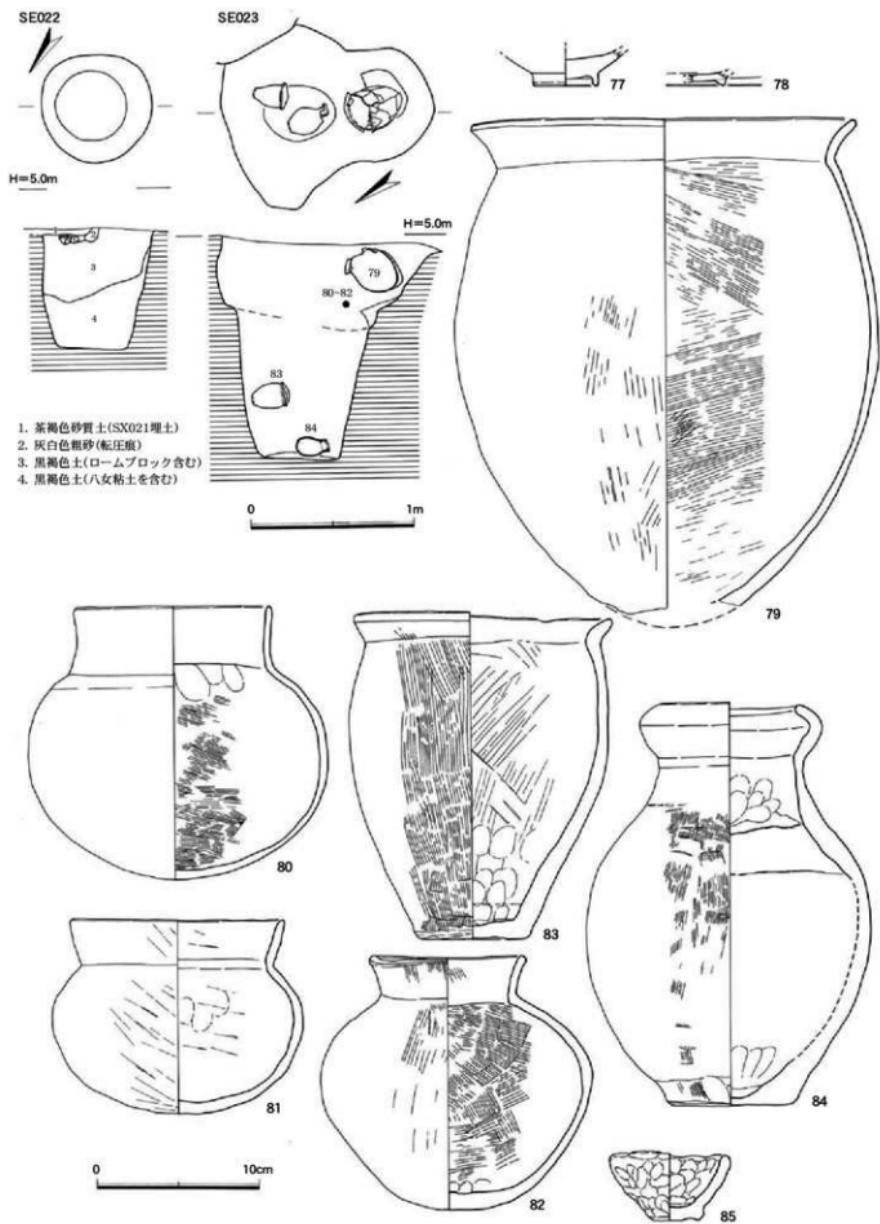
出土遺物（第26図 79～85） 79～82が後出する遺構に伴うと考えられる遺物で、83～85は先行する井戸に伴う遺物である。

79の口縁部は外反して屈曲している。底部は粘土充填部分で剥落しているが、痕跡からレンズ状を呈するものと考えられる。胴部調整は内外面刷毛目による。80～82はまとまって出土した直口壺である。いずれも底部はほぼ丸底を呈している。80は摩滅が進み明らかでないが、胴部外面はケズリ状の調整を行っている。81は胎土に粗粒の混入が非常に多い。内外面共にケズリに近い擦痕が残る。82は外面は内面と異なる原体により縦方向にナデ付いているが、底部付近はよりケズリに近い。

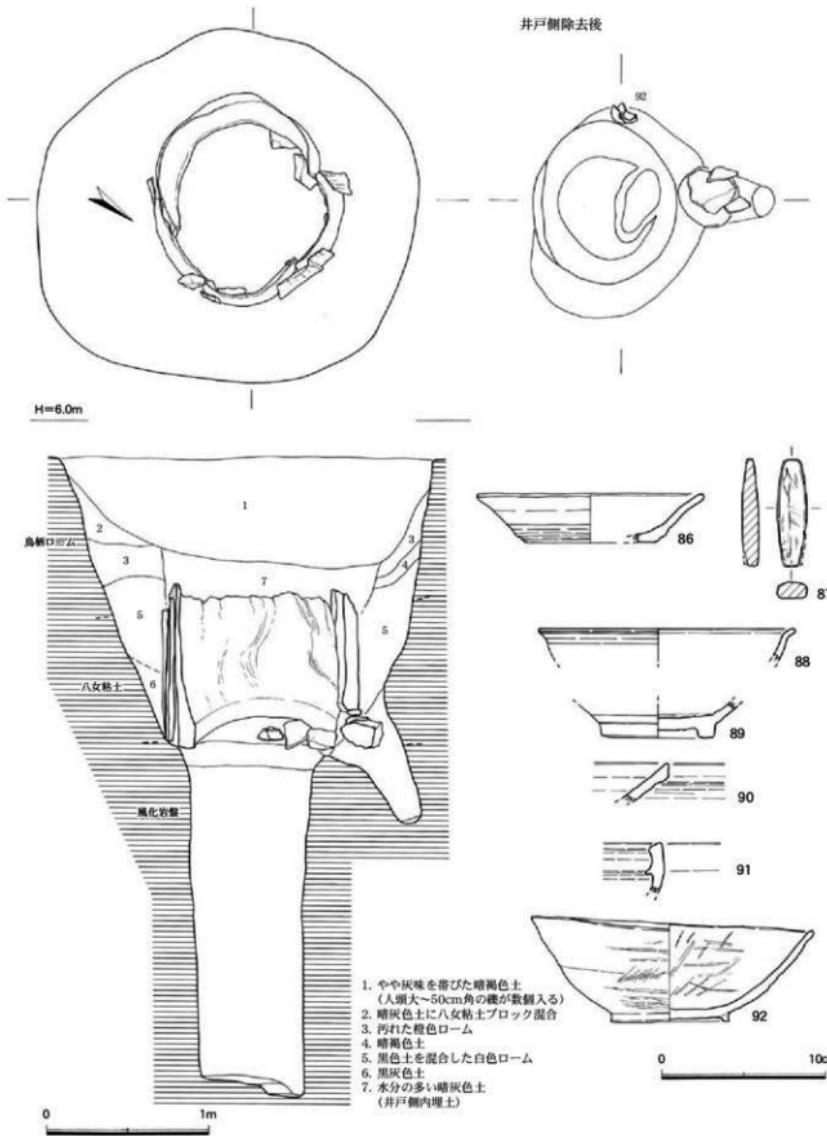
83は平底の甕である。外面及び内面上半部分には刷毛目が残るが、原体が異なるものと考えられる。84は袋状口縁壺である。器壁が厚手のつくりである。底面は平底で、外面には縦刷毛が認められる。85は手づくねの椀である。

S E032（第27図）

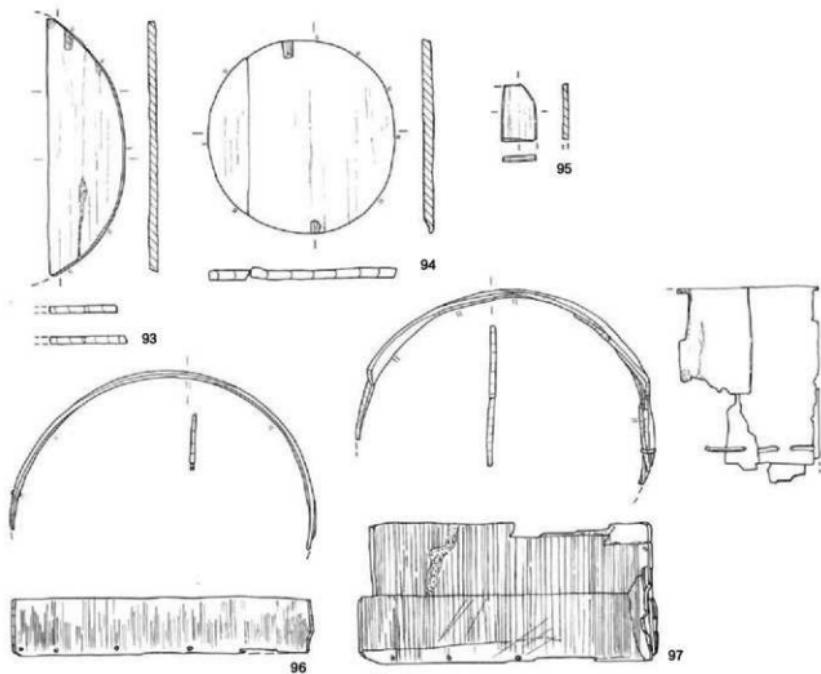
C区北東隅で検出する。掘り方の平面は径2.3m程度の略円形を呈する。検出面から60cm程まで（1層）は井戸側の痕跡が確認できていない。また1層中には50cm角の礫が数個入っており、土層状況から考えると井戸廃棄時に井戸側部分を破壊した痕跡であろうと考えられる。1層以下で確認した井戸側は内径で約1mを測る。現状で高さ1m程度の木材の内側を削り貫いたものを組み合わせて井戸側にしたものと考えられる。井戸側両面を構成する木材で最も幅広のものは井戸側の南西部にあた



第26図 SE022・023及び出土遺物実測図 (1/30, 1/3)



第27図 S E032及び出土遺物実測図1 (1/30, 1/3)



第28図 S E032出土遺物実測図2 (1/4)

0 10cm



写真3 井戸枠木材2

写真2 井戸枠木材1

り、ほぼ半周を構成している（写真2・3はこれが取り上げ時に壊れたもの）。この材には両端に角孔が穿たれており、構築時に材を吊り下げるなどの用途に使用したものと考えられる。さらに残りの半周を3個体で構成して、その接合個所には裏から縦板等で補強し、漏水を防止している。井戸側木材の下端部分は水平でなく中央部分が削り上がっており、端面は内側を幅10cm程削り出している。井戸側は掘り方中途の平坦面上に乗せるように据えられており、安定を図るために、平坦面との間に部分的に人頭大の礫を挟んでいる所もある。北側壁面には径30cmほどの掘り込みがあり、礫はこれを埋めた後に据えている。また最も大きな井戸側が削り上がった部分には平坦面との間隙に瓦器椀1個体が半割された後、重ねた状態で倒置されていた。井戸構築に伴う行為によって据えられたものと考えられる。井戸側直下からは水溜めは無く、径65cmの筒状の掘り方が2m程掘り下げられている。最終的に検出面からの深さ3.9m、井戸底標高1.9mを測るが、井戸側下端以下は地山が風化岩盤となっており、現状では完掘後も湧水は壁面から染み出す程度である。また1層以下の井戸内埋土からも人頭大礫が20数個出土しており、これらの礫は井戸構築に本来使用されていたものが落下した可能性が高い。出土遺物は少量であるが、掘り方・井戸側内いずれからも糸切りの土師器が出土しており、陶磁器類では青磁が極少量であることから、掘削・埋没共に12世紀代中頃～後半に行われたものと考えられる。

出土遺物（第27・28図） 86・87は1層から出土し、この他は井戸側内部からの出土である。

86は外底面糸切りを行う土師器壺である。復元口径13.6cmを測る。87は紡錘形を呈する石製品である。表面に擦痕が認められる。

88は青磁碗口縁部破片である。同安窯系の製品であろうか。89・90は白磁である。89は内底面の釉を輪状に掻き取る匂類、90はIV類の碗である。91は陶器の鉢である。内側に煤が付着する。92は瓦器椀である。外面～口縁部内面までが黒化している。内面は灰白色を呈する。内面には斜方向の磨きが行われ、小口當て具痕が残る。外面は屈曲部の下にナデつけたような痕跡が残り、屈曲部より上位は横ナデが明瞭である。93・94は柾目型の曲物底板である。外周面に目釘跡が残る。95は折敷の底板であろうか。96・97は目釘跡が残る曲物である。97にはサクラ皮による結束部分が残っている。

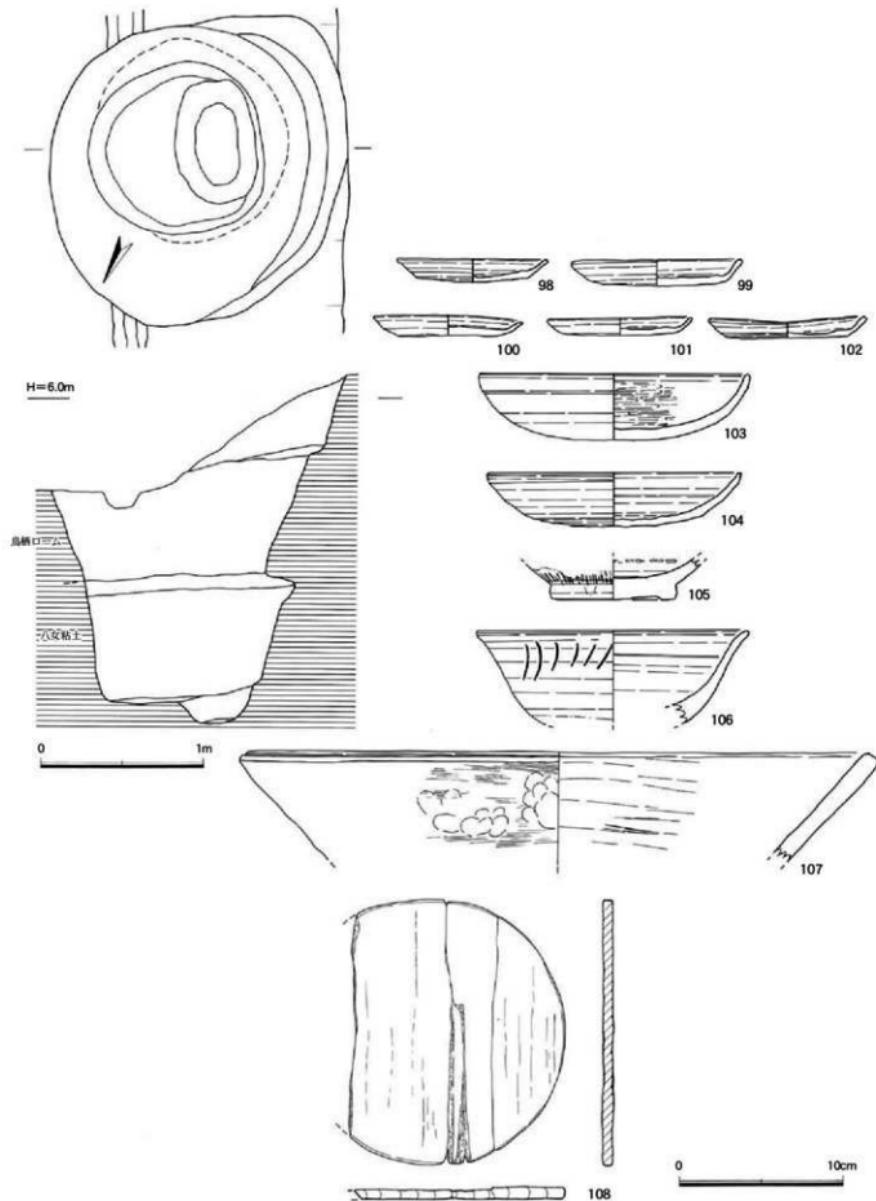
S E 033（第29図）

C区北東隅で検出する。平面径1.8mのやや歪な円形を呈し、検出面からの深さ2.1mを測る。掘削は八女粘土層を80cm程掘り込み、東側を除いて壁面に20cm程の抉り込みがみられる。また底面は西側が一段低くなる。埋土は検出面から70cmは暗褐色土で、これ以下は暗灰色土である。下層からは自然植物遺体が多く出土している。現状で井戸枠は認められない。土師器はヘラ切りが大半で、一部に糸切りが混在していることや、陶磁器は白磁が数点出土するのみであることなどから11世紀後半代と考えられる。

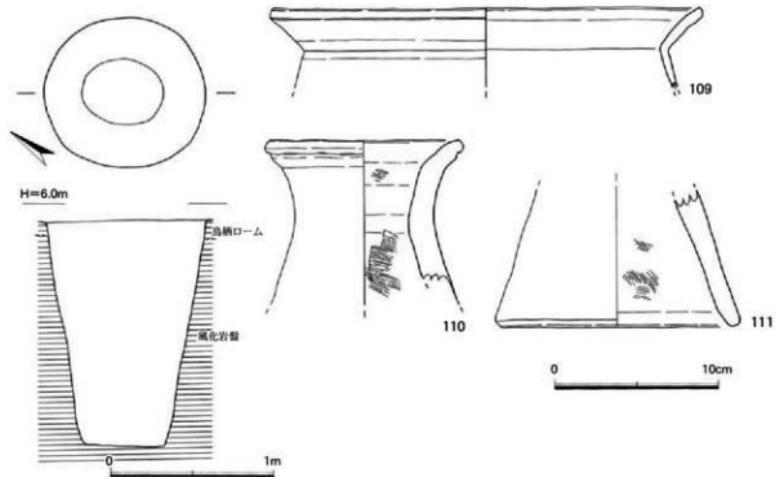
出土遺物（第29図） 98～102は土師器皿である。98～100はヘラ切り、101・102は糸切りを行う。103・104は土師器壺である。103は外底面糸切りであるが、丸底に仕上げている。内面には小口痕跡が残り、横方向の磨きを行っている。104はヘラ切りである。105・106は白磁碗である。105はIV類の底部である。106は外面に縦方向のヘラ描き文を施す。107は土師質の鍋である。調整は横ナデを行い、外面に煤が付着する。108はヒノキ征目材による曲物の蓋であろうか。径16.2cm、厚み6mmを測る。

S E 035（第30図）

C区西側で検出する。平面径90～100cmの略円形を呈し、検出面からの深さ1.4mを測る。S E 035周辺及びこれより北西側は八女粘土層が失われており、現状では10～20cm厚の鳥栖ローム層下は風



第29図 S E033及び出土遺物実測図 (1/30, 1/3)



第30図 S E 035及び出土遺物実測図 (1/30, 1/3)

化岩盤となっている。このためS E 035～038では湧水がほとんど認められない。壁はやや傾斜を持って掘り下げられ、壁面に抉り込みは認められない。埋土は検出面から25cmは鳥栖ロームブロックを多く含んだ暗褐色土、130cmまでは鳥栖ローム及び風化岩盤をブロック状に多く含む黒褐色土、以下底面までは使用時の崩落土と考えられる暗黄褐色土である。出土遺物は小破片が極少量出土するのみである。弥生時代後期に位置付けられる。

出土遺物 (第30図) 109は甕の口縁部である。く字状に屈曲し、口縁部端面は面取りを行う。摩滅により調整は不明である。110・111は器台である。接合部分がないため2個体としているが、胎土・器面の状態から1個体と考えられる。上端面は僅かに折り返して丸く仕上げる。また内面には刷毛目が残っている。

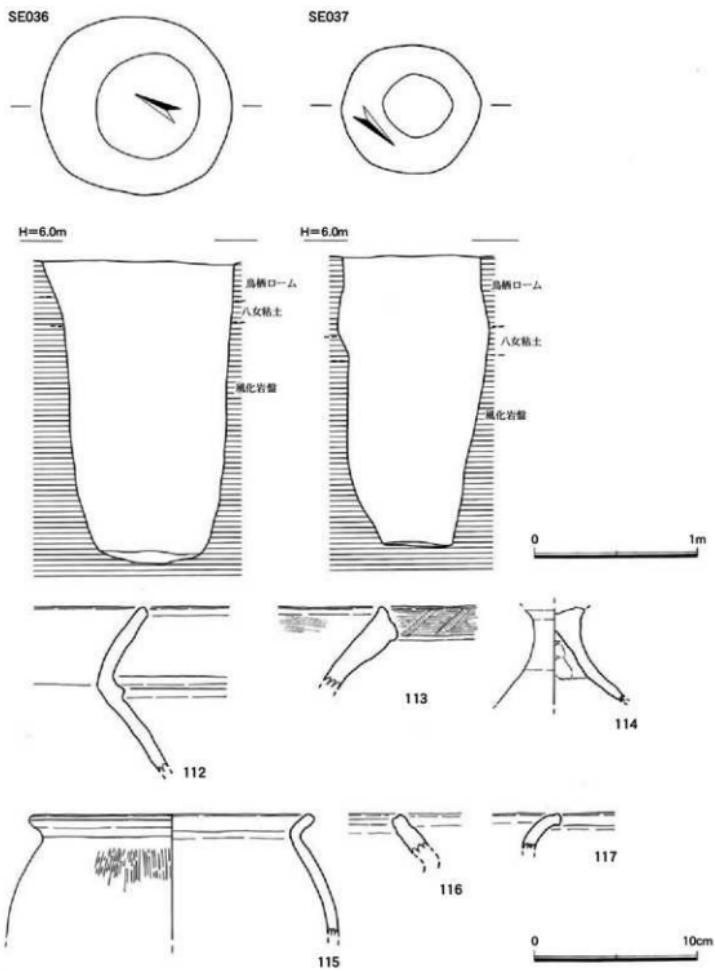
S E 036 (第31図)

C区西側で検出する。平面径1.1m程の円形を呈し、検出面からの深さ1.85mを測る。埋土は検出面から1.1mは遺物を多く包含した暗褐色土、これ以下はロームブロックを多く含む黒褐色土で遺物は少量となる。また底面から10～15cmは赤灰色土が堆積している。湧水が見られないことから雨水等の溜め水を行った可能性が考えられる。出土遺物から弥生時代後期に位置付けられる。

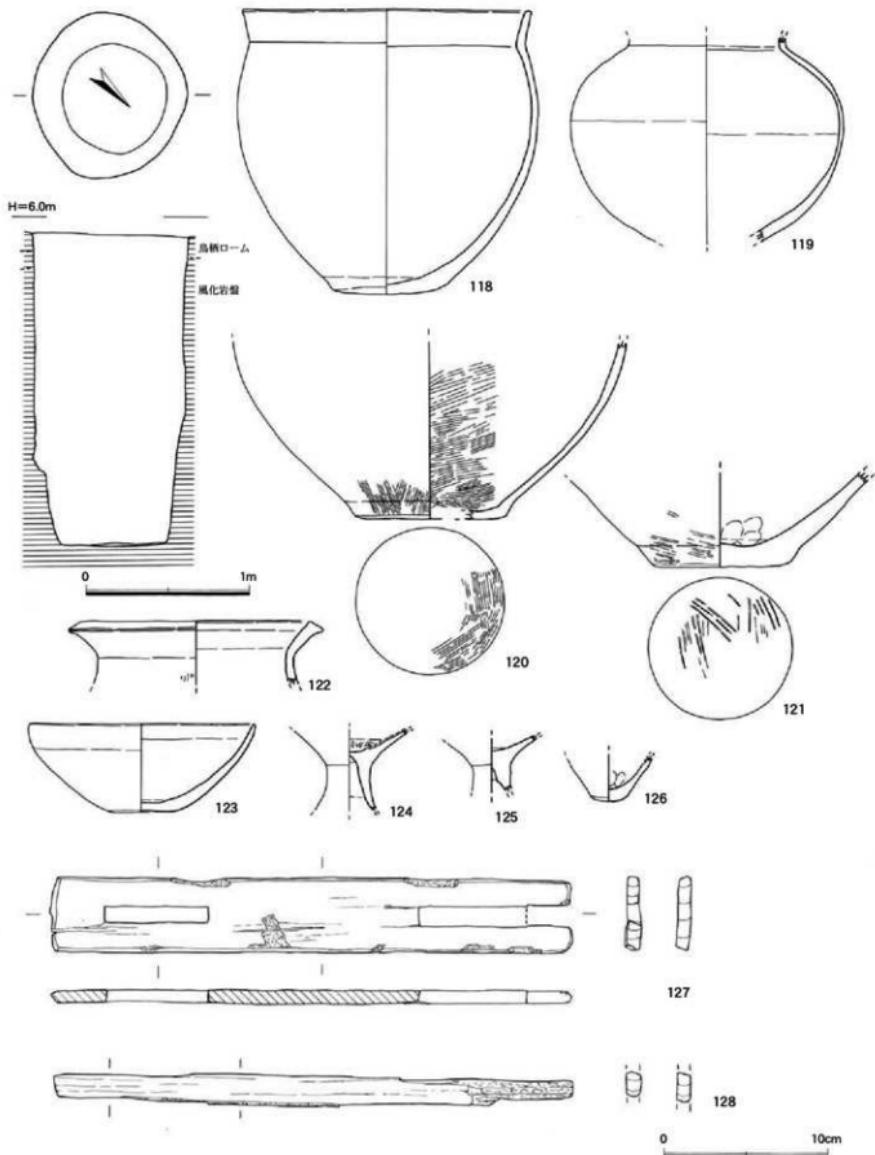
出土遺物 (第31図 112～114) 112は甕である。剥落が進み調整は不明である。頸部外面に三角形突帯を1条貼り付ける。113は口縁部破片である。端面は断面三角形に作り、刷毛目を行った後板状工具の小口を押圧して施文している。114は小型の高坏脚部である。

S E 037 (第31図)

C区西側で検出する。平面径80～85cmの円形を呈し、検出面からの深さ1.8mを測る。壁面は鳥栖ローム層と八女粘土層の境で僅かに抉り込む。埋土はロームをあまり含まない暗褐色土である。弥生時代後期中頃前後と考えられる。



第31図 SE036・037及び出土遺物実測図 (1/30, 1/3)



第32図 SE 038及び出土遺物実測図 (1/30, 1/3)

出土遺物（第31図 115～117） 115は甕である。口縁部は短く、く字状に屈曲する。胴部外面には綱刷毛を行う。内面はナデである。116は複合口縁壺口縁部破片である。端面は面取りを行い四角く仕上げる。117も壺の口縁部破片である。端部は外方に強く屈曲し、端面は面取りを行う。

S E 038（第32図）

C区西側で検出する。平面径1m前後の円形を呈し、検出面からの深さ1.9mを測る。埋土堆積状況は東側に並ぶS E 036と同じで、検出面から1.25mは遺物を多く包含した暗褐色土、これ以下はロームブロックを多く含む黒褐色土で遺物は少量となる。ただここでは下層埋土の下半部分から木器・自然木等が出土している。弥生時代後期前半～中頃に位置付けられる。

出土遺物（第32図） 118は甕である。胴部下半を中心には2次的な被然痕跡が残る。外面の調整は不明瞭であるが、内面はナデによる整形を行う。胎土に石英砂粒を多く含む。119は壺である。摩滅が進むが、胴部内外面に刷毛目は認められない。120・121は胴部下半～底部破片である。120は外面は刷毛目の後ケズリ状のナデを行うが、外底・内面は刷毛目が残る。121は外底面直上に叩きの痕跡が残る。122は口縁部破片である。123は楕である。底面は小さな平底である。124・125は小型の高杯である。器表面の大部分が剥落しているが、124の杯部内面に丁寧な磨きが残っている。126は手づくねの楕である。127・128はスギ征目の加工材である。128は半分を失うが、127とほぼ同じ形状になるものと考えられる。127は長さ32cm、幅4.6cmで2ヶ所に63～65×10～12mmの長方形孔を穿つ。組合式案（机）の部材と考えられ、127・128は1セットになるものであろう。

4) 溝（SD）

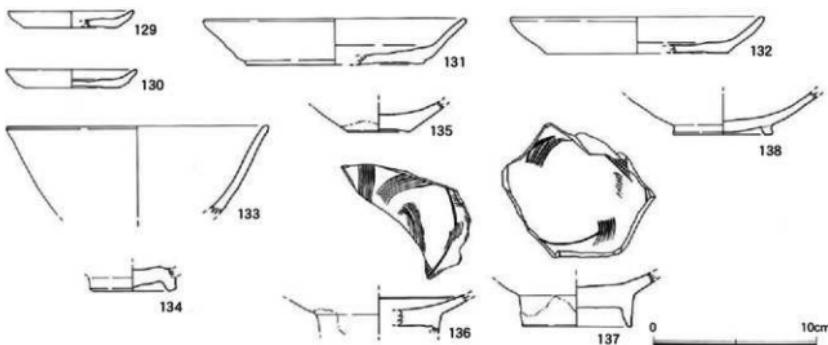
A・B区で確認されたS D 020は道路状遺構を構成する溝と考えられるため、後の項で説明する。

S D 001・019（第4図）

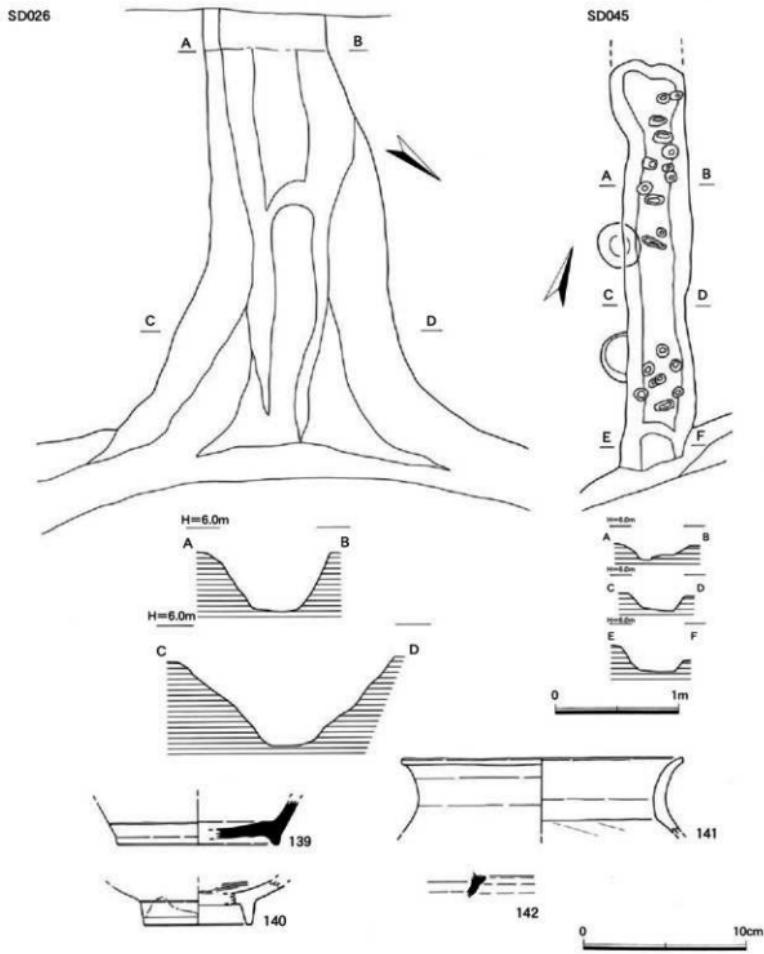
近・現代の用水路である。S D 001はB区で西側に蛇行している。明治末～大正初の地図にもこの地点でクランク状に折れ曲がる水路が表現されており（第2図）、これに当たるものと考えられる。S D 019は段落ちの法尻に添って延びるものでS D 001と一連の溝である。

S D 018（第4図）

S D 001に平行して延びる溝である。B区では西側に蛇行し、S D 020を切って延びている。幅4m以上で、検出面からの深さは南側で30cm、北側で50cm程度を測る（第6図 14～20層）。



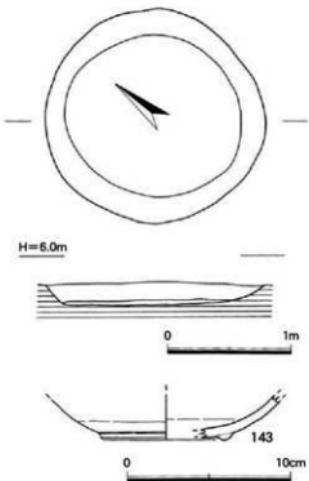
第33図 S D 018出土遺物実測図（1／3）



第34図 SD026・045及び出土遺物実測図 (1/40, 1/3)

断面浅皿状を呈する溝で、底面付近には粗砂が堆積しており、流水があったことを伺わせる。なおS E017との前後関係は不明である。また土層図よりこの部分には全く転圧痕跡が認められないことから、道路状遺構が廃絶した可能性が高いと考えられるが、出土遺物から明確な時期差は見出せず、中世前半代において、実際の道路使用面が溝を挟んだ両側にあり、道路と溝が並存していた可能性も想定しておきたい。

出土遺物（第33図） 129～132は土師器皿・壺である。摩滅が進むものもあるが形状からいざれも糸切りと考えられる。133・134は青磁碗である。133は龍泉窯系、134は同安窯系である。135～



第35図 SK034及び出土遺物実測図
(1/40, 1/3)

出土遺物 (第34図 139・140) 139は須恵器の高台付き壺である。高台は底面端部に貼り付けられ、体部も直線的に外方に延びるタイプと考えられる。140は白磁V-4類碗である。内底面に櫛描き文が施される。

S D045 (第34図)

C区南隅で確認する。N-20°-Wの方位でほぼ直線的に延びる溝である。幅50cmを測り、断面は浅皿条を呈する。埋土は暗褐色土で、溝底面には工具痕状の窪みが残る。小田編年IV期に位置付けられようか。

出土遺物 (第34図 141・142) 141は土師器甕である。胴部内面はヘラケズリを行う。142は内傾する短い蓋受けを有する須恵器壺身である。

5) 土坑 (SK)

S K034 (第35図)

C区北側で確認する。平面径1.8mの円形を呈する。検出面からの深さ15cmで、底面は平坦である。埋土は暗褐色土粒を含む灰褐色土である。遺物は小破片が数点あるのみであるが、埋土・遺物からは中世前半代の可能性が考えられる。

出土遺物 (第35図) 143は瓦器碗の底部破片である。摩滅が進んでいる。

6) 道路状遺構 (S F)

S F027 (第36・37図)

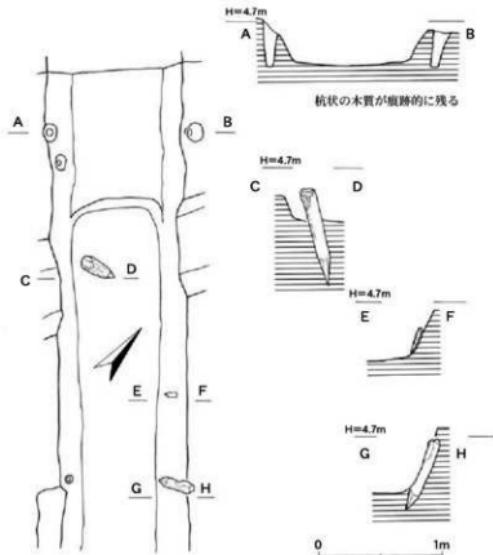
本調査地点は大宰府水城東端の切り通し部分（推定東門）から、博多湾岸部に位置する博多遺跡群に向かって直進する官道（水城東門ルート）の推定部分にあたっていた。現在福岡市内では那珂君休遺跡・板付遺跡・高畠遺跡・井相田遺跡等で道路関連と推定される切り通し、溝、波板状遺構、転圧痕跡等が確認されており、その直進性についても指摘されてきたところである。今回の調査ではこれ

137は白磁である。135は皿である。僅かに抉り込みを有する平底である。136・137はV-4類碗である。内面に櫛描き文を施す。138は瓦器碗底部である。

またこの外ウシの右桡骨1点とタコノマクラ類カシパンが1点出土している。右桡骨は両端の関節部分が欠けている。水分が多かったためかビビナイトが析出している。貝類でタコノマクラ類のカシパンは食料としての利用は不明である。

S D026 (第34図)

A区南西端高位部に位置する溝である。幅1~1.3mを測る。造成された段落ち部分に向かって延びているが、溝自体が段落ち部分で扇形に広がりを見せていることや、溝を境に北側では段落ちの切り落としが緩やかとなるなどの変化が見られることもあり、SD026がこの造成と関連をもつ可能性が考えられる。埋土は上半が褐色土、下半がロームブロックを含む褐色土である。出土遺物は少量であるが、埋土・遺物等から中世前半代のものと考えられ、これから考えると、現状で残る段落ちの掘削もこの時期を下らないものと考えられる。



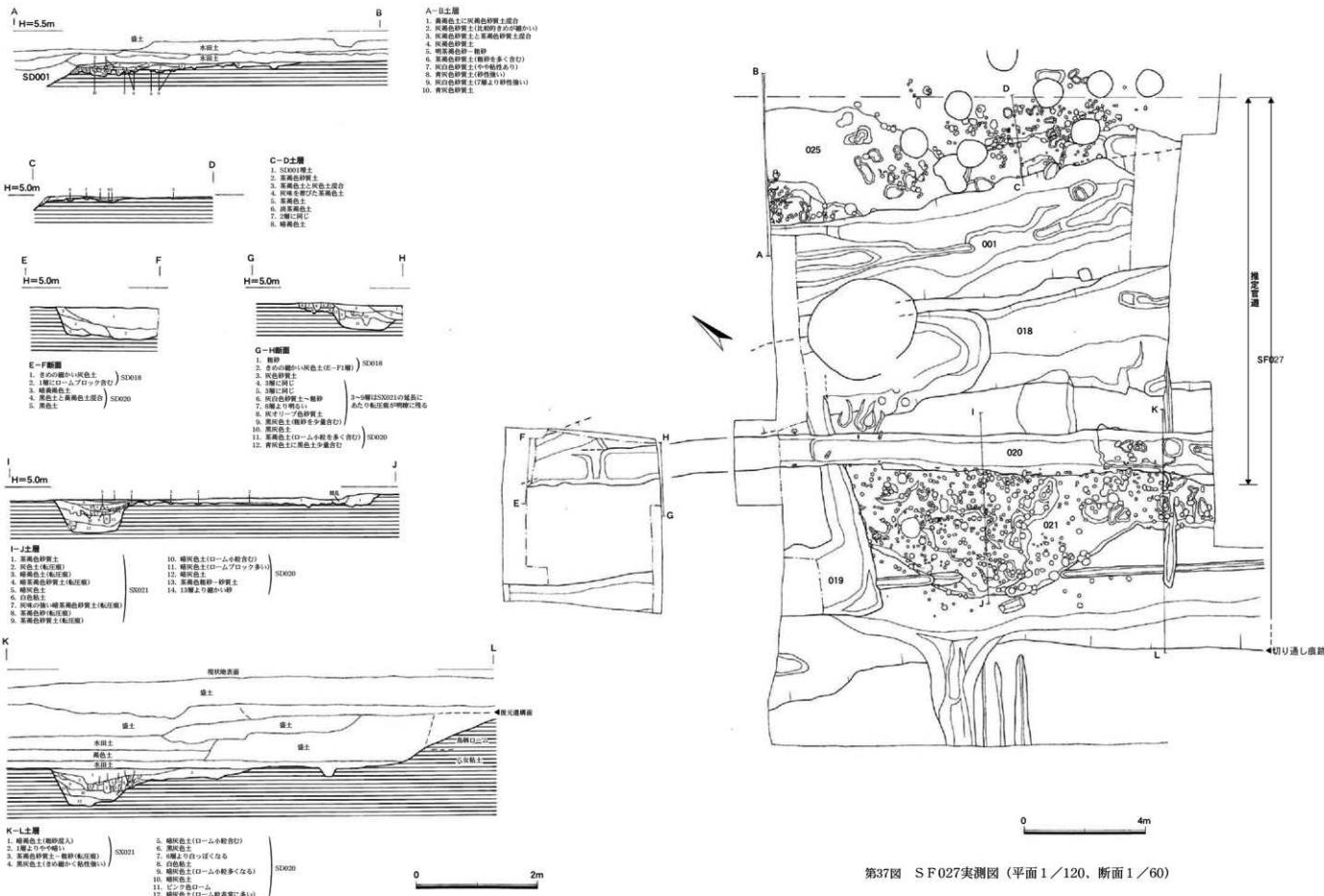
第36図 SD020杭位置図 (1/40)

凸が多くなるが、総じて平坦である。A区北西側では壁近くにおおよそこれに沿う角度で杭が打ち込まれており、痕跡を含めると5ヶ所で確認されている。位置的にも溝に伴う施設の一部と考えられるが、機能については不明である。本来は左右で対になっていたものであろうか。溝は1条のみでこれと対になる施設については検出していないが、南西側は丘陵高所にあたり、遺構の残存状態などを考えてもこの部分では考えにくく、道路はSD020から北東側に形成されていたものと考えられる。後述するSX025の形成もこれを裏付けるものと考えられ、SD020からSX025の北東端部までを道路幅と考えると、道路使用面で11m程度が復元できる。また大正末～昭和初期の地図を重ねあわせると、本調査地点から30m北に推定の道路に合致する幅15m程度、長さ70m程の切り通しが表現されている(第2図)。これらのことから本地点での本来の官道は幅12m前後の切り通しを行い、南東部の切り通し法尻付近に溝(SD020)を掘削した可能性が考えられる。なおこの道路造成に伴う路面形成の状況を示す痕跡は残っていない。またこの溝は現在の地割にはほぼ一致しており、南側では宅地境界とほぼ重なっている。8世紀代の土師器・須恵器が出土しており、この中でも転用窓(146)は注目される。

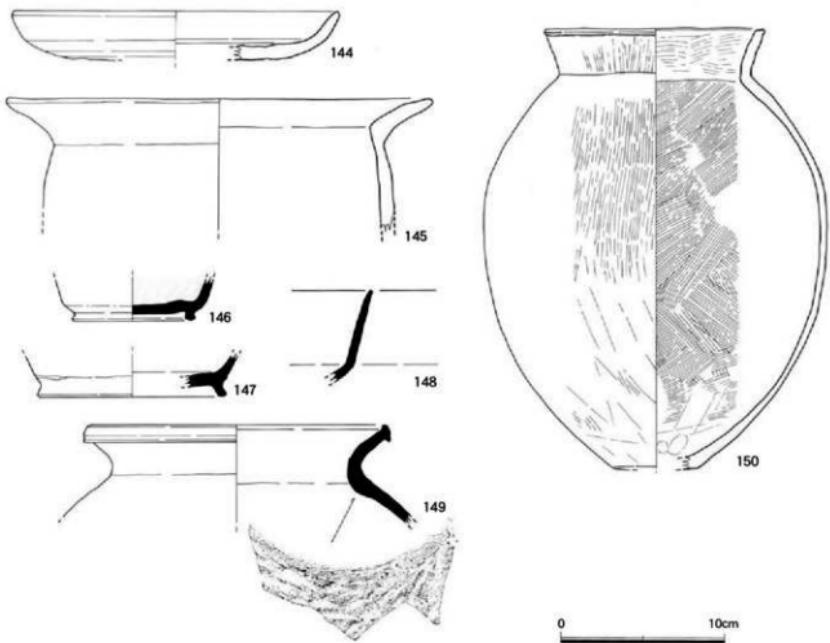
SX021はSD020の南西側に広がる転圧痕である。厚さ10～20cmの粗砂混じりの茶褐色砂質土もしくはきめの細かな黒灰色土を除去した面で径7～15cmを主体とした円形～三日月形の転圧痕を検出した。これは高畠遺跡第18次調査でも確認されているが、連続する土坑状を呈する波状遺構については今回は認められなかった。この点圧痕及び上面覆土である砂質土はSD020の南西側に限定され、溝より北東側には広がっていない。また上面覆土の認められない部分(B区等水田土直下で検出した部分)では転圧痕に類似した三日月形の痕跡が残っていたが、埋土が水田土そのものであり、

に関連する遺構として溝(SD020)、転圧痕(SX021・025)、切り通し痕跡を確認している。

SD020はA区及びB区で検出している。A区ではほぼ直線をなし方位を磁北からN-40°-Wにする。北側のB区では未掘部分を経てやや西側に振れているようであるが、A区側の南東端部SD020西壁とB区検出部分の西壁をつなぐとこれと、この方位とはほぼ平行なラインとなる。これまでの調査地点でも微視的には直線性が否定されるような部分も見られているが、巨視的には極めて高規格の直進性が保たれており、今回の調査地点においてもこの現象が認められたものと考えられる。溝幅は南東端部で1.8mを測りやや広くなるが、北西側では1m程度である。検出面からの深さは30～70cmで、断面は全体に均整の取れた逆台形を呈する。底面は南東側では比較的凹



第37図 SF027実測図(平面1/120、断面1/60)



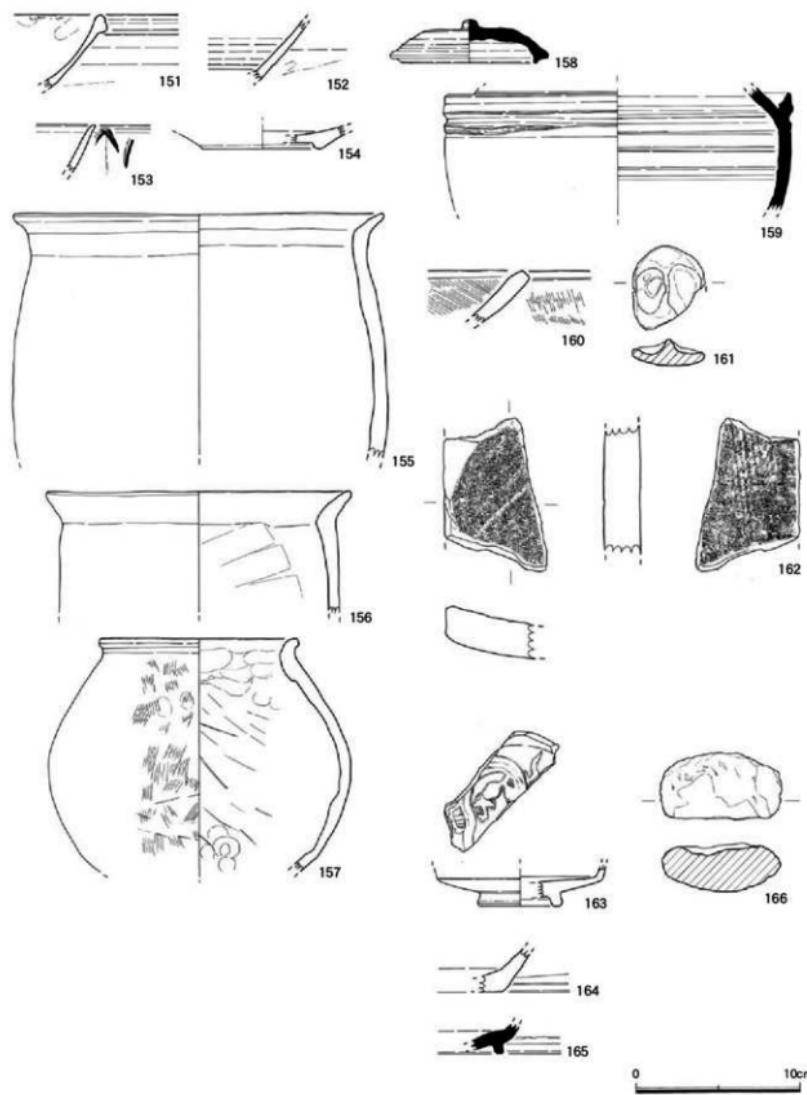
第38図 SD020出土遺物実測図（1／3）

牛馬による新しい水田耕作痕と判断できる。土層から転圧は溝埋没後に行われており、11世紀後半～13世紀前半代の遺物が出土している。

S X025はSD001の北東側に見られる転圧痕である。ここでも砂質土で上面が覆われているが、遺存状態があまりよくないため範囲については不明瞭な部分があるが、およそ第37図破線ラインで転圧痕及び覆土である砂質土の範囲が想定でき、これが道路幅を画するものと考えられる。またここで北西壁土層を見ると、転圧と土砂の投入を繰り返して整地していくことが確認できる。出土遺物としては枢府系白磁が出土しており、14世紀代まで下る可能性が考えられる。

SD020の南西側に高さ80cm程の段落ちが形成されている。SD020にはほぼ平行しており、北西側では西に振れている。SD020との間にSX021が形成されており、SD026もこの段落ちに規制されていると考えられることから、少なくとも中世前半代にはほぼこの位置で切り落とされていたものと考えられる。また可能性として官道をこの段落ちとSD020間に設定することも考えられたが、前述した地図上の切り通し表現やSX025の存在からその可能性は無いものと考えている。現状では掘削時期は明らかでないが、SD020と同時期と想定でき、これが中世までの間に西側に広げられたものと理解しておきたい。

以上の状況から本地点における道路状遺構の変遷を簡単に推測すると、8世紀代の官道開設に伴い、調査地点部分では切り通しを伴う道路となり、主軸方位は道路全体を通す磁北からN-40°-W前後にそろえられ、その直進性は完全に維持されている。溝（SD020）肩からの路面使用可能幅は11



第39図 S X021・025出土遺物実測図 (1 / 3)

～15mほどと考えられ、路面のいわゆる舗装施設などは全く不明である。ほぼ8世紀代（一部9世紀初頭にかかる可能性も考えられる）で一端使用が停止された後、11世紀後半で再び道路としての使用が再開される。この際は使用部分には点压・砂質土による覆土が行われたようである。この際路面は全体が使われたものではなく、端の部分が使用され、中央部はくぼみ状の溝SD018が流れていた可能性も考えられる。またSX021とSX025は同時に使用されていたのか、時期的な差があったのかは不明である。なおこの時点まで北東側の切り通しは残存していたものと考えられる。この後14世紀代に完全に道路としての機能は廃絶し、水田化されていったものと考えられる。

問題は日々残っている。例えば本地点より300m南でおこる御笠川の渡河の問題である。この推定ラインでは御笠川が蛇行する部分を渡ることとなる。直進性が保たれていることが明らかであり、渡河の方法については路路固定の時期と共に重要な問題となるであろう。また今回は目的地と考えられる博多遺跡群の直近で確認されておりその意義は大きいといえるが、目的地での展開、接続する官道との関係なども重要であろう。

出土遺物（第38・39図） 144～150はSD020出土遺物である。144は土師器壺である。外底面に回転ヘラ削りを行う。145は土師器甕である。146～149は須恵器である。146は高台付き壺を覗むしくは墨液容器に転用したものである。外底面には回転ヘラケズリを行う。内面全体に墨液痕が付着し、本品中に墨液を溜めていたことが想定できる。なお現状では内底面の擦痕までは確認できおらず、覗として使用したものではなく、墨液を溜めただけの可能性が高い。147も高台付き壺である。外底面は回転ヘラ削りを行う。148は楕である。149は甕である。150は弥生時代後期に位置付けられるレンズ底の甕である。

151～162はSX021出土である。151・152は白磁碗である。153は鍋連弁を有する龍泉窯系青磁碗II類である。154は陶器の底部である。全面に施釉している。155～157は土師器甕である。内面はヘラ削りを行う。158は須恵器蓋である。159は須恵器長頸壺の胴部であろうか。届曲部に鉗状の張り出し部分を貼付する。なおこれと同一固体と考えられるものがSD020から出土している。160は土師質の鍋である。161はつまみを有する鏡形の土製品である。162は平瓦である。摩滅が進むが、凸面に叩き痕跡が残る。

163～166はSX025出土である。163は板府系白磁壺である。高台置付き～外底が露胎となる。内底面に龍（？）が陽刻される。164は陶器底部である。165は須恵器壺である。166は表面の摩滅が進む楕形鍛冶津である。

7) 小結

遺構の変遷を極簡単に述べまとめてみたい。本地点ではナイフ形石器（43）、縄文時代石器（4）が出土するが、原位置からは遊離しており他に同時代遺物はない。遺構が認められるのは弥生時代中期後半からである。現状では弥生時代前期～中期前半の遺構・遺物は認められない。調査地点における削平の状態を考えると、特にA区では削平により、掘削の深い井戸しか残っていないが、これに付随する生活遺構群が展開していたと考えられる。弥生時代中期後半～終末期には井戸を主体として多くの遺構・遺物を検出している。また遺物としては井戸出土の木器、終末期に位置付けられるSE009出土の瓦質土器小形甕（袋状甕）が注目される。この後は古墳時代の布留式土器はほとんど見られず、後期に位置付けられる遺物も少ない。

次いで8世紀代には官道（水城東門ルート）が開設される。道路は9世紀初頭前に一旦使用を停止したのち、11世紀中頃～14世紀代に姿を変えて再び使用されている。この時期には周辺に集落が形成されており、井戸が確認されている。道路廃絶後には水田化されたものと考えられる。



写真4 A区全景（南西から）



写真5 C区全景（北から）



写真6 B区南西半全景（西から）



写真7 B区北東半全景（東から）



写真8 SC031（北から）

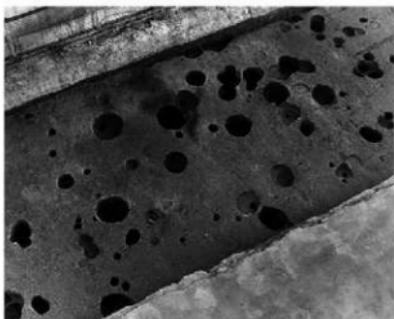


写真9 SB041・042（北から）



写真10 SE002（西から）



写真11 SE003（北から）



写真12 SE004（東から）



写真13 SE005（北から）

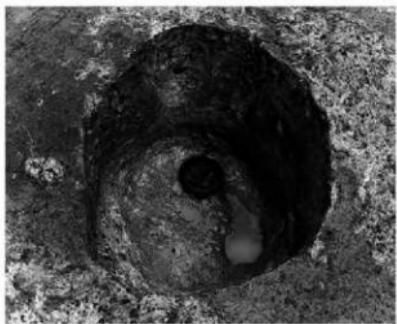


写真14 SE006（西から）



写真15 SE008（南から）

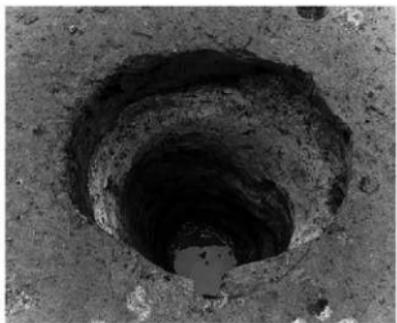


写真16 SE009（北から）



写真17 SE009遺物出土状況（西から）



写真18 SE010（北から）



写真19 SE011（北から）

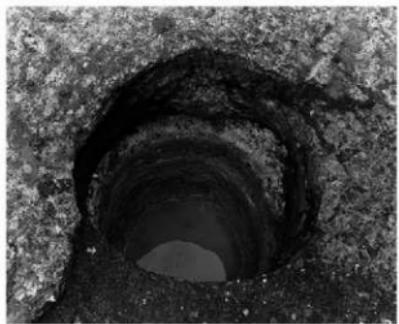


写真20 SE012（南から）



写真21 SE013土層

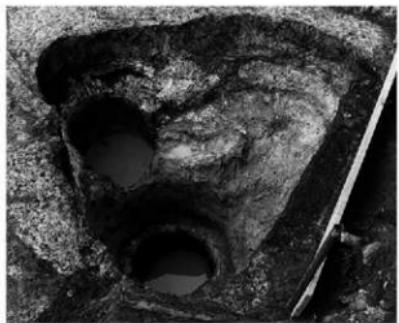


写真22 SE013（西から）

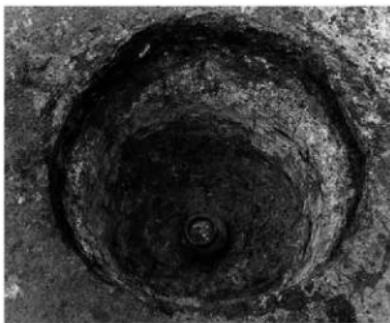


写真23 SE014（東から）



写真24 S E015（南から）

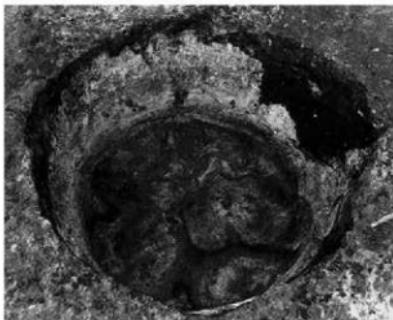


写真25 S E016（東から）



写真26 S E017水溜め確認状況

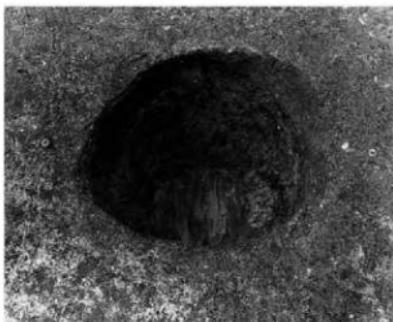


写真27 S E022（南から）



写真28 S E023上層遺物出土状況（東から）

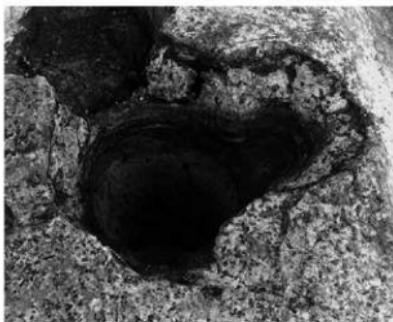


写真29 S E023（北西から）

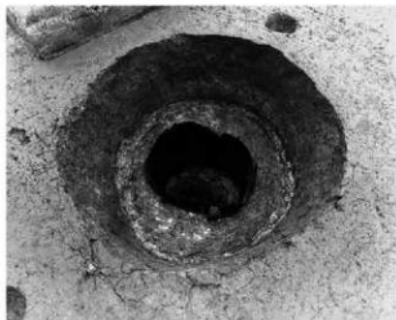


写真30 SE032（東から）



写真31 SE032井戸側（北から）



写真32 SE032井戸側（東から）

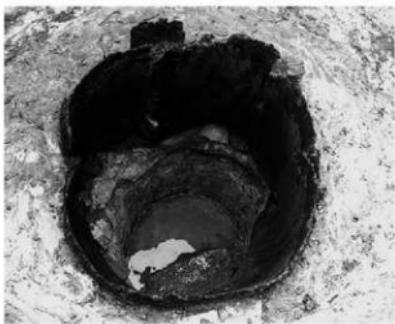


写真33 SE032井戸側（南西から）



写真34 SE032完掘状況（東から）



写真35 SE033（西から）



写真36 SE035（東から）



写真37 SE036（東から）

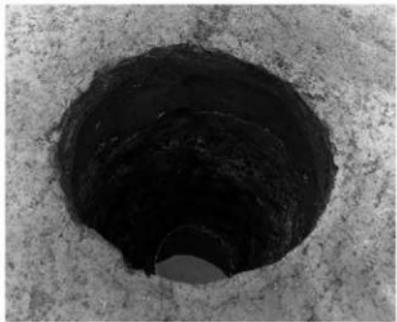


写真38 SE037（北から）



写真39 SE038（北から）



写真40 SD001・018（南東から）



写真41 SD045（南から）



写真42 SF027（南西から）



写真43 SF027内SX021（南西から）



写真44 SF027内SD020土層1（第37図I-J土層）



写真45 SF027内SD020土層2（第37図K-L土層）



写真46 SF027内SD020・SX021（北西から）



写真47 SF027内SX021転圧痕（南東から）



写真48 S F 027内 S X021転圧痕除去後（南東から）



写真49 S F 027内 S X025南半転圧痕（南東から）



写真50 S F 027内 S X025北壁土層（第37図 A-B土層）



写真51 S F 027内 S X025北壁土層（拡大写真）

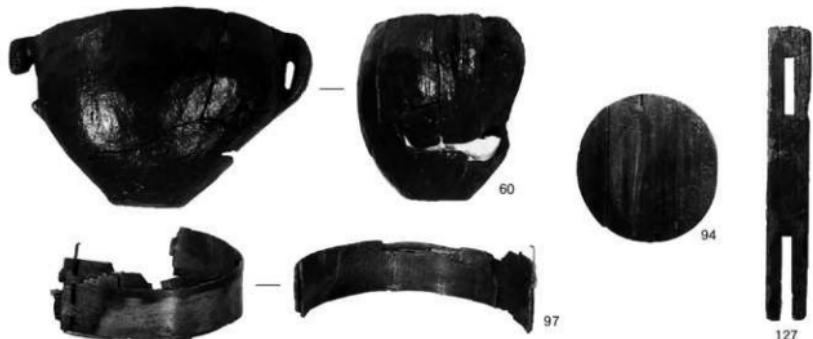


写真52 出土遺物

書名ふりがな	ひえさんじゅうご																																				
書名	比恵35																																				
副書名	-比恵遺跡群第79次調査報告-																																				
巻次																																					
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書																																				
シリーズ番号	821																																				
編監者名	長家 伸																																				
編集機関	福岡市教育委員会																																				
発行機関	福岡市教育委員会																																				
発行年月日	20040331																																				
作成法人ID																																					
郵便番号	810-8621																																				
電話番号	092-711-4667																																				
住所	福岡市中央区天神1-8-1																																				
遺跡名ふりがな	ひえいせきぐん																																				
遺跡名	比恵遺跡群																																				
所在地ふりがな	ふくおかはかたくさんのう2ちょうめ17ばん2 44ばん																																				
遺跡所在地	福岡市博多区山王2丁目17番2 44番																																				
市町村コード	40132																																				
遺跡番号	37-0128																																				
北緯	33° 34' 44"																																				
東經	130° 26' 2" (世界測地系)																																				
調査期間	20020904-20021204																																				
調査面積	880																																				
調査原因	整備工場 駐車場 ショールーム建設																																				
種別	集落																																				
主な時代	弥生 中世																																				
遺跡概要																																					
	<table border="1"> <thead> <tr> <th></th><th>住居</th><th>建物</th><th>井戸</th><th>溝</th><th>土坑</th></tr> </thead> <tbody> <tr> <td>弥生</td><td>1+α</td><td></td><td>21</td><td></td><td></td></tr> <tr> <td>古墳</td><td></td><td>2+α</td><td></td><td>1</td><td></td></tr> <tr> <td>古代</td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr> <tr> <td>中世</td><td></td><td></td><td>3</td><td>1</td><td>1</td></tr> <tr> <td>近代</td><td></td><td></td><td></td><td>2</td><td></td></tr> </tbody> </table>		住居	建物	井戸	溝	土坑	弥生	1+α		21			古墳		2+α		1		古代						中世			3	1	1	近代				2	
	住居	建物	井戸	溝	土坑																																
弥生	1+α		21																																		
古墳		2+α		1																																	
古代																																					
中世			3	1	1																																
近代				2																																	
縄文	ナイフ形石器 石錐																																				
弥生	弥生土器 木製品																																				
古墳	須恵器 土師器																																				
古代	転用鏡 須恵器 土師器																																				
中世	白磁 青磁 梅型鍛冶滓 瓦器碗																																				

特記事項 水城東門ルート上の道路状遺構を検出

福岡市埋蔵文化財調査報告書第821集

比恵 35

-比恵遺跡群第79次調査報告-

2004年(平成16年)3月31日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目6-1

印刷 国崎美峰堂
福岡市東区箱崎1丁目20-5